

二十四輩順拜圖會

後篇

陸奥出羽
四
下野





親聖人 中舊蹟 二十四輩順拜圖會後篇卷之四

目録

○陸奥之部

宝池山蓮生寺

福清康若寺

養徳にうけね

甲斐守 白川

櫻木 志保山

名五川を流るる

○出羽之部

古水山若澄寺

象 瀧

如來山淨土

明恵上人の傳

阿比山 志保山

阿比山 志保山

阿比山 志保山

阿比山 志保山

阿比山 志保山

阿比山 志保山

阿比山 志保山



體性上人一族成勝と感化

石の法あり 白川冥阿武蔵川

佐茂庄司の城跡

武蔵明神 志保山

石森山 志保山

石森山 志保山

石森山 志保山

石森山 志保山

石森山 志保山

○下野之部

那須野

栗井山慈願寺

祇橋

稻本山親尊寺

足尾同親尊池

明皇靈地を以て

親石

与市宗三の墓

高栄山法徳寺

長次郎盛長墓

まうく山

華岳山安養寺

延壽寺

宮村河橋

藤崎山慈願寺

日光山 今皇八幡宮

石上おれおりの所廟

藏光の所 秀治の所

室の八幡

高田尊修寺

足利の寺換

以下

親鸞聖人御書蹟

二十四輩巡拜圖會後篇卷之四

河州專教寺

了貞撰

陸奥國

若出羽を以てして大國なりと後から三國とせらる按ずるは常陸の國の
正史に「いづれにせよ中より移るるとして常陸と云ふ陸奥の常陸より西の方
奥に去るに陸奥の國ありと云ふは陸奥の國に於ては陸奥の國に於ては陸奥の國に
陸奥の國に於ては陸奥の國に於ては陸奥の國に於ては陸奥の國に於ては陸奥の國に
の書に於ては陸奥の國に於ては陸奥の國に於ては陸奥の國に於ては陸奥の國に
年 奥州國司百濟敏徳始て其令と執とて日平の令を以て其の始なり
焉其集より大伴敏徳とてなりて其派の長秋一節を掲ぐ其經教三箇の内
いづれに於て代案とてありまざるものごとく云ふは其の事なり

宝池山蓮生寺 東流

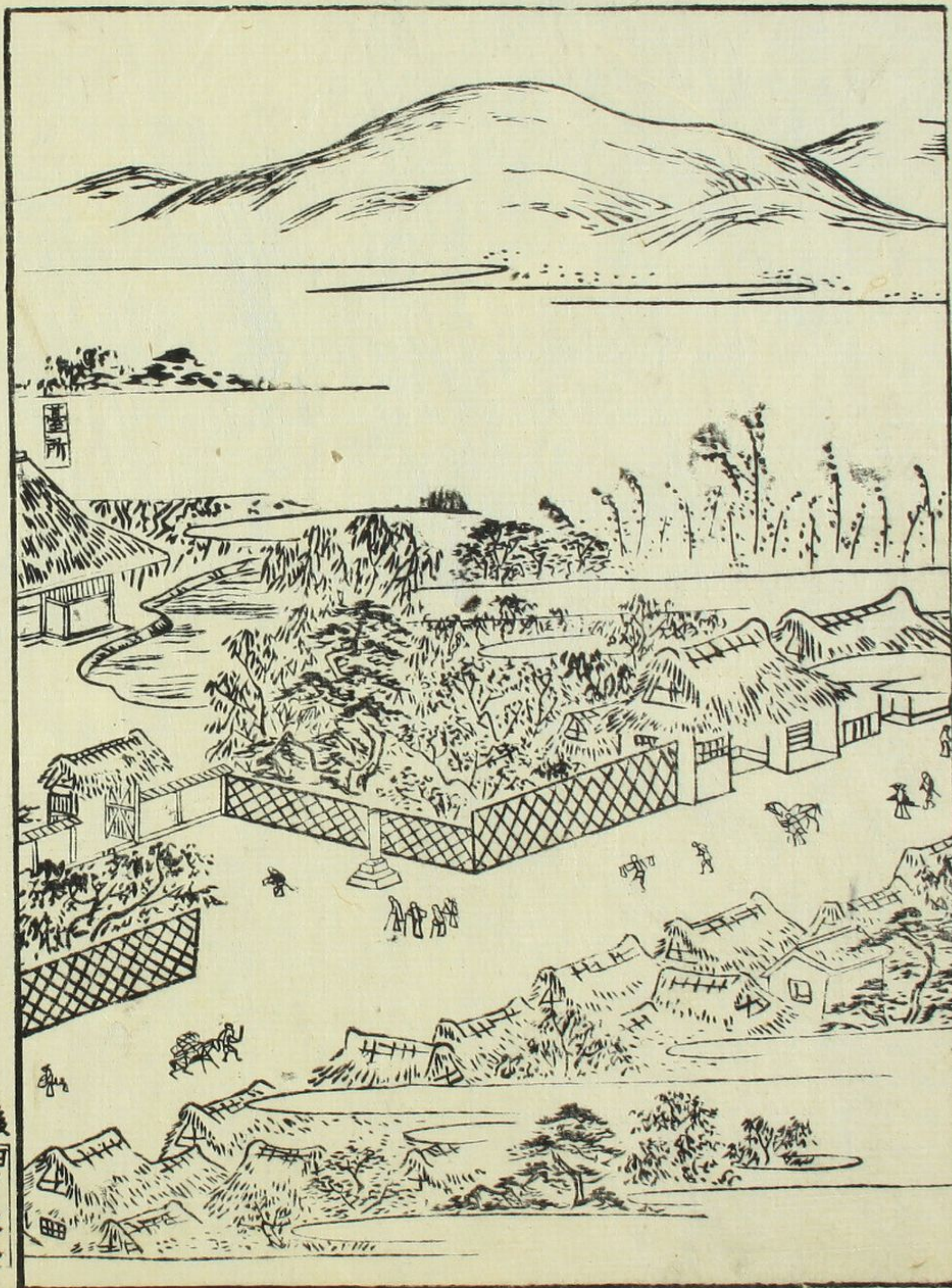
陸奥國白川郡 柳倉あり

慈院の降筆其堂院と号以二十に輩身八番證性法師の送

基方り ○奉尊阿彌陀佛 運慶

安又用基證性法師の俗姓と爲りて桓長天皇の後胤鎮守府將

あさひ
朝倉
あさひ
蓮生寺



後四ノ巻



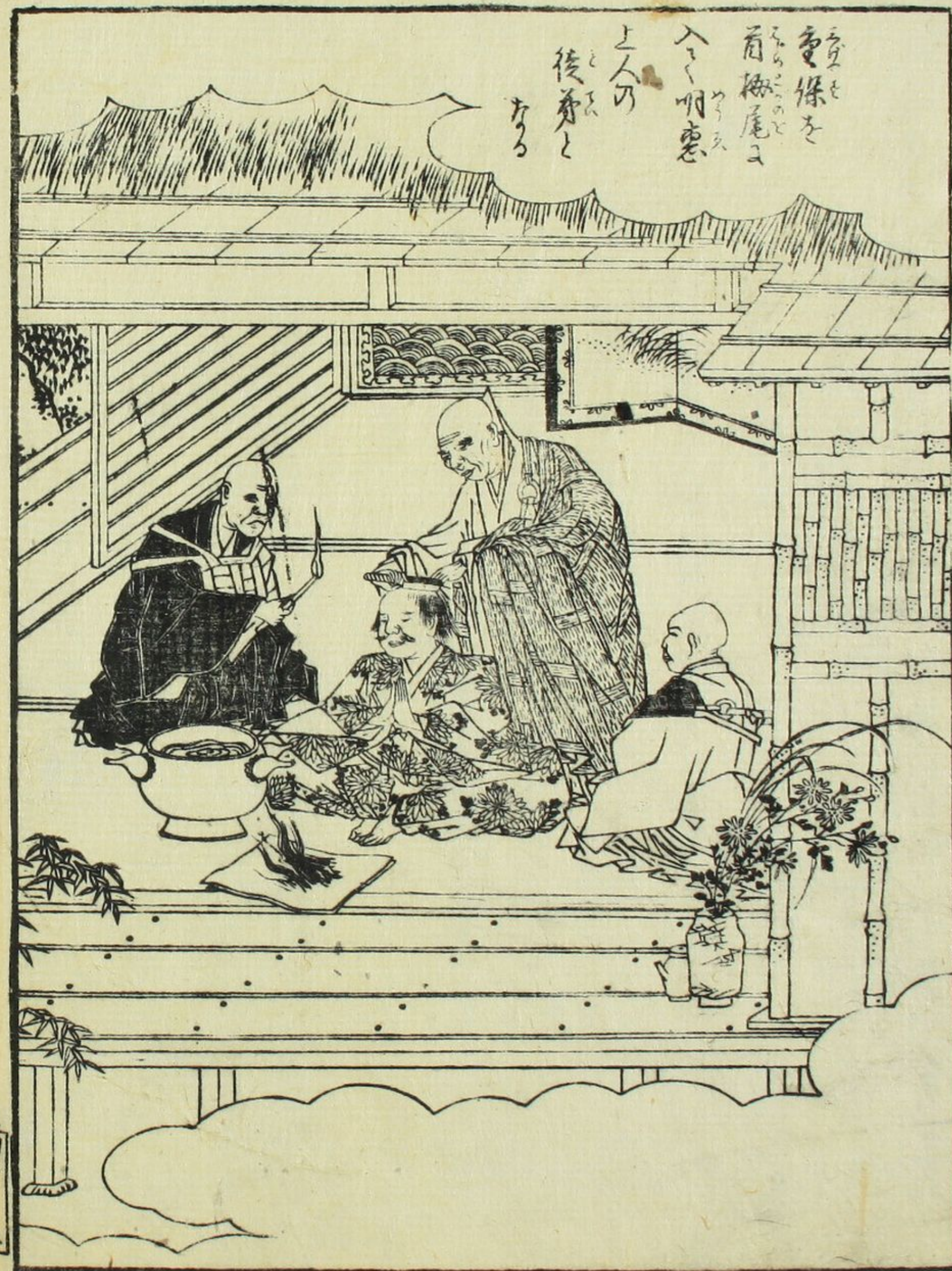
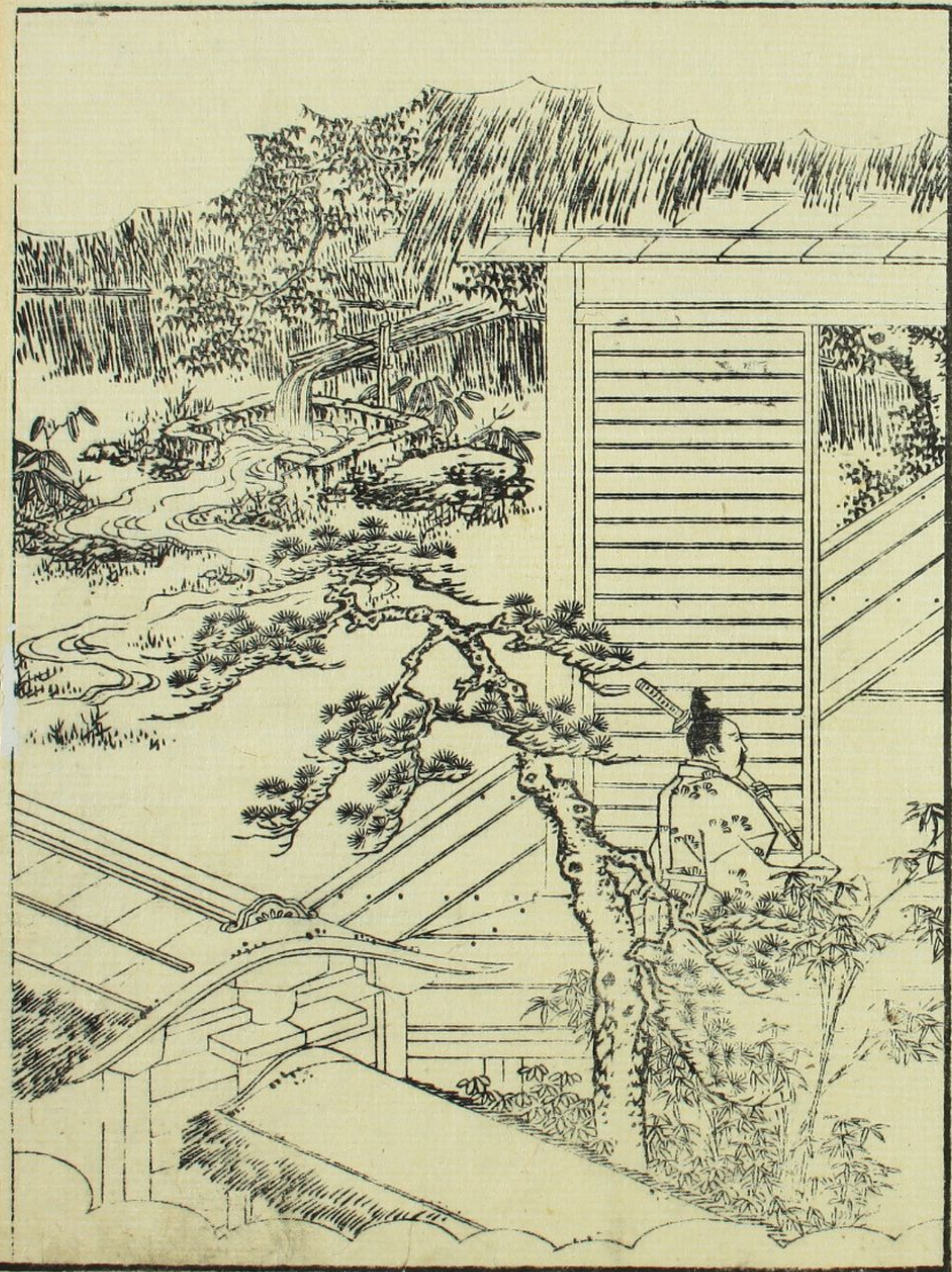
月トキキ
人ノ
論
山
保
浄論
物
静
物
と
人



小條朝
東門院
舟
高山
保
浄論
物
静
物
と
人

日づく討死せしは流布せし密を遺して未師よのり 柳尾明惠
上人の禪麻と仰き人間の不定芭蕉池邊と名しく枕中或門のつらひ
夕あしを期とくびさるるも今度我父重忠舎見重保を始し一族前
多うまのりと淑命の死をいへば我其子牙の死して存命と云きあり
神根株既と盡して誰一人善提を訪むのまゝ一類の冤寇をかく
惡縁と墮落し修羅の妄執教とるの期と云はしるは我一人と善
提のあまて死を出離のるにまのひ竊法味成あまして是より推業
せり阿まの上人と云大慈大悲をこれ終ひ因縁の道を承し終ると泪くひふこ
らしが上人いと殊勝のりと思し終ひ即保たれは華嚴一乘此法と懸執
と餘し終ひ重秀執喜踊躍と云は利賢深衣乃身とあり名も惠空と改め
上人と改稱し善提を勤むるを源切なりかくて年月を積りつるも聖なる
難妙甚且と修むるが園林の一系容易悟得の終りしは惠空ひそにあり

らく人吾長とる不のりて乃又負の業を強てなるとせば子百奉と健るも
終は其甲斐あましく終るをいへばや人間より六十年今己は其才に及
干附事いひるの奉をなてかよりなきた終と修せんとは是より思なつた
一我きく今東方又他力真宗とて易妙直入の法盛んは終つたよと云
後達と云はしるは是とて乃兼元元年十二月二日まゝ夜ふたふ山と云の
ひ出東流してよりつる宿縁の法よりさるや此所高祖尊聖人常陸の
園小幡郷と弘法はしくは直は彼西(五)誠聖人の淨刹と名流 係三年 来
まを法と云は物より作き終りつる善提の要路と云き終ると消柳のけ
しき源よりしる聖人奇特のあひとは終ひま今や末世濁丸の凡まいうて
う聖道の修終を成就とるを得んまは自力功德とたのまは地力本報
の如来と打ちまかせたりて難若餘終をよりとて一向は報謝恩徳の名号を
唱渡し修終念なり耐は彼佛力不可思議の利益廣大にして自己の往





生ハ定定澄得ノ順次ニ神通方便を以て有縁の衆生と縁成せんと抄ひくも
何とノ悪報又志門とて親屬も忽ち浄去れ东门より守ん可努く疑ハ有
べく後若哉惠空法とちよやといこまやうと教存はし終ひくも惠を以て
喜の洞だた人ハ立不に信心受得ノ即本宗を改め其宗又降儀ノあり
多の種よ於て名も證性とありたれ終ひ御子ノ列ニ加りたり終ひより以来
信心縁名あるのみなく終又文永二年に月廿八日物飼の房舎はして性生ノ素
懐をぞ遂らさたり 時二八 其後真身澄光法師遺跡を再真ノこれを蓮生寺
と号したりや 初め下野國塩原郡物飼と云ふ處に創設ありて身十二世宗元代定永に奉じて寺を
根せしより其遺基のうへに各妙之の菩薩法堂を修し今此寺は即ち此山之族なりはつた力信心の功
徳よりんく實に値かた除障の悲教といふより悲愍法より生てまうとまごくと感徳のりしつこれ
二の門に徳光房法舎を修補して妙の華嚴院と号しけり後又蓮生寺と号し今上末の縁記の善く
六谷邊跡福より向てこれと記に於ては室水の九享保の記にも性生房發心より入寂まで其代はよお遠有
きとつて是より先なりやと云ふ
後寺これと云ふは幸甚なり

○石の乃清水ハ柳倉より雷より下りて下野と奥州の國邊界と云ふ處にあり候

松野柳乃西野法師東國形脚の古流あり性生に

石の乃清水なるく柳ヶけをりてとてをりてと云ふなり 西野法師

○白川の園これ又柳倉より西南奥州の口より白川とはつと川より山をり
此不地地隈よりつて山をこすと園所を立三石の園所と号し西野法師天をり
御中諸園は園石を立終末の地なりと云

後乃乃ばかをりてりふふりて秋風そそりて川の園 兼盛

○阿武隈川の白川と根田との間と流る川なり水源ハ大熊の山より流し出末海に入る
此間ハ神のつらとありと云ふ川筋ハ流るる處國二ハ松葉沢と云ふ乃神傳なり

あふくまうきりまきり明ぬも若くは中しりてはと云ふ

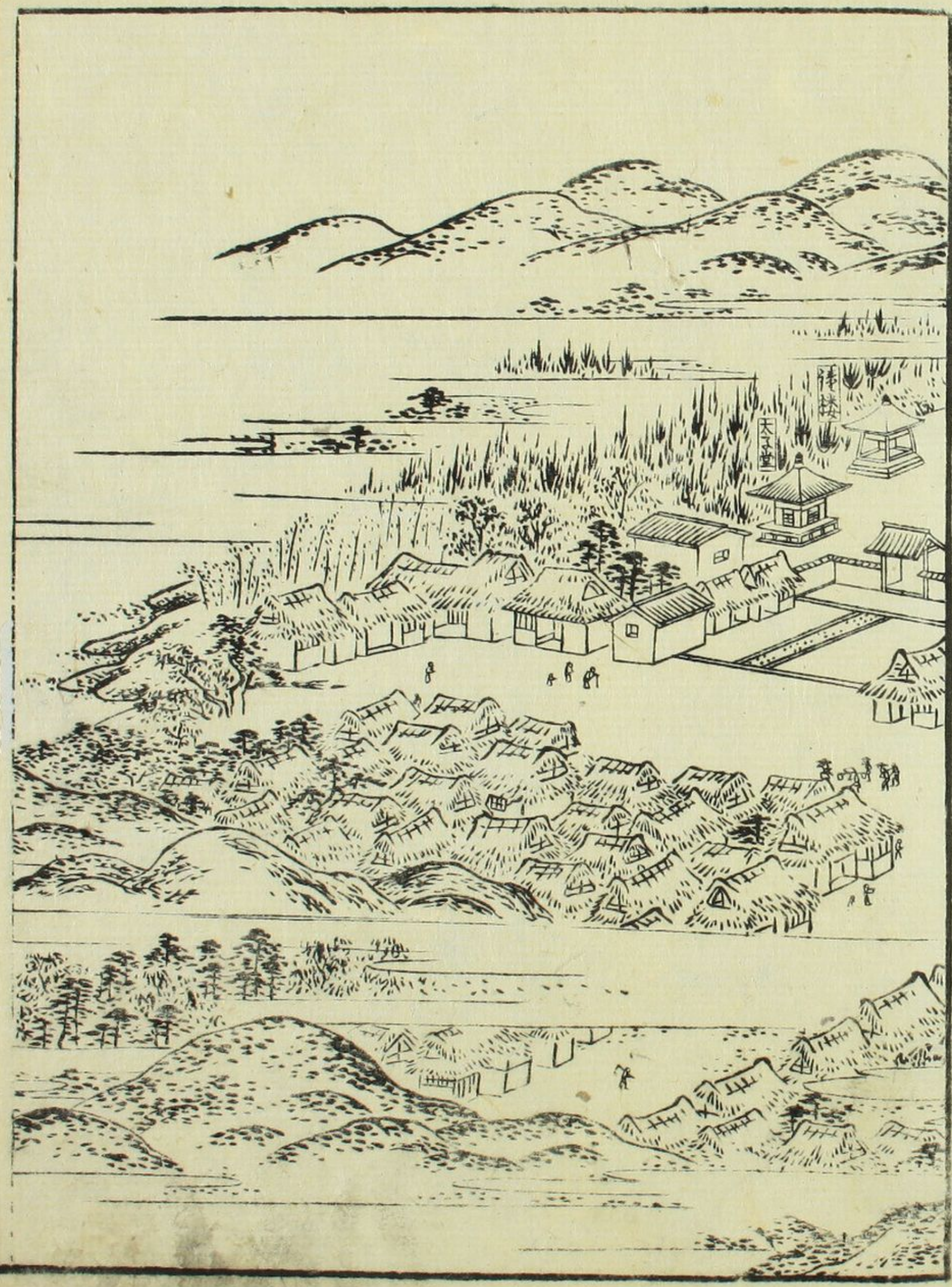
このつれ神のつらとありの洞川と云ふなりと云ふと云ふ

福嶋康若寺

西流 日國云のふ都福嶋あり

寺ハ聖人の真身富田明教房の遺跡なり

○溪香山ハ柳倉より福嶋へは驛法の間倉の倉より東にあり信長山と名付たり
山の極高平村と山の峯の水茶女塚とあり橋ヶけ橋今ハ枯れて其流ハ一ヶ地
そのつらつと三の王下向はしませりわくつと園の司を奉りつけし人なりと云

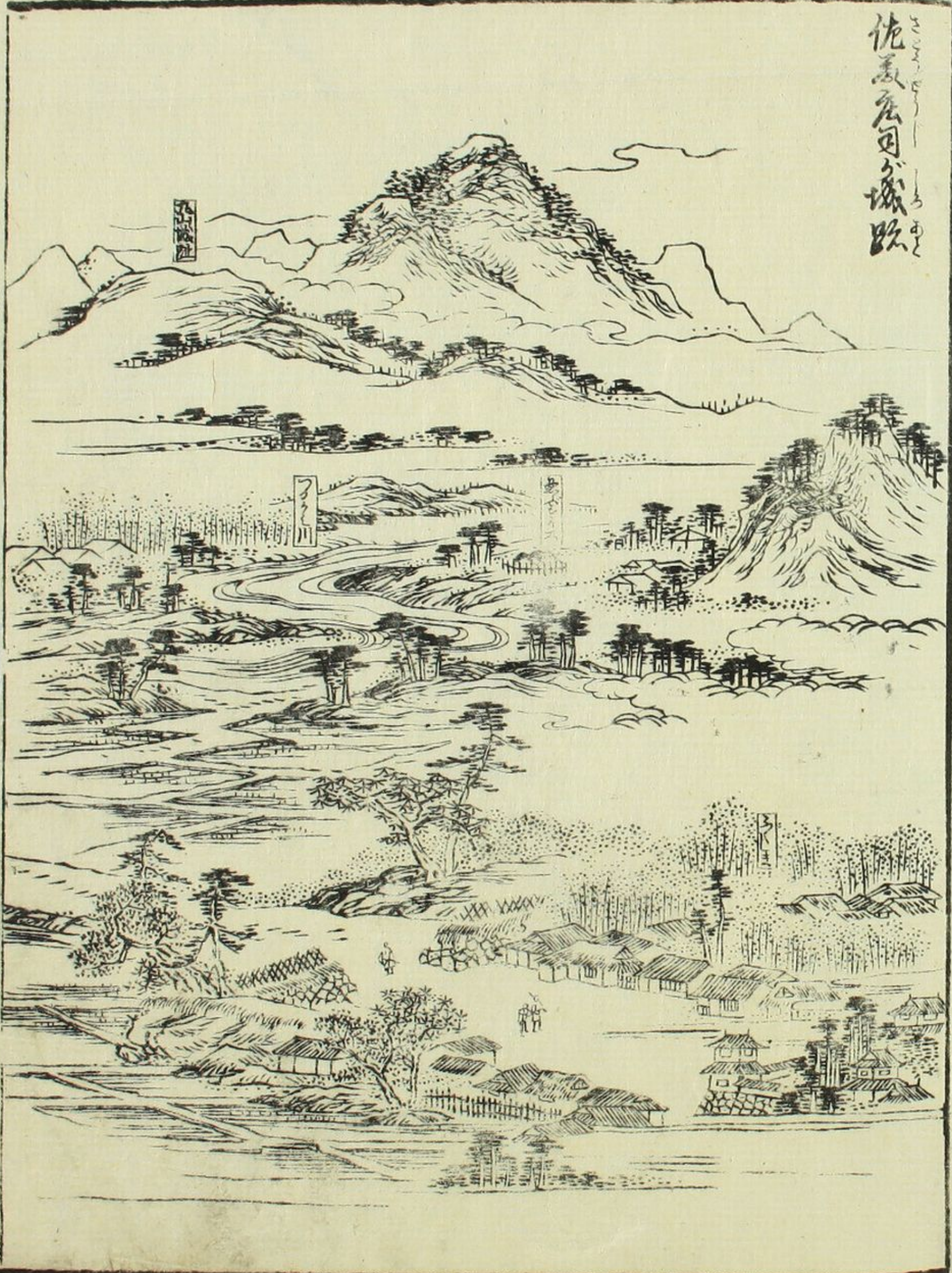




ふれ年の
 何さくハ
 人を
 ちんしの
 耶



采女山の舟
 の什と置て
 王の如う
 を解く
 ぬ
 め
 ぬ
 め
 め



佐美尾田城跡

まうけのゆきまらるる川まづつらなりしは玉ふくはうせ給ひ既よゆこそ
 春ぬらんやよ未女かろしのかくも川流まきまきとまきとせ給ひ
 のうて玉よとあままいせしうへんは

あさう山うげえぬ山のあさくの人をさるしゆな

とつゆまを玉の御心さけく見波なくもそのひささくも人難波はの秋

はあさう山のそ秋は秋の父母の中うそまらる人のはじめにまきまき

貴之がま今の存まはつり

○あさうの沼田く藤原の村あう八雲村あまあさうれ沼はあやめとよめ

るいひうとかり彼國ま富浦はしうまらるうと入日まらくとあ

うまの藤原

あさうのくれ沼はのぬまのたうのあつる人まあやうとん

○信美山まのぶの里まあゆのうまらるるまは石方り

人ままらるるまきまのあまの山下ま高の根かりたり

○澤波川次才ま新ハ松田の宿名産の瀬あり二本松の宿西の山は湯泉

あり此石ハ高地の城まらるる甚繁たの地かり

○安達系ハ二本松の遠傍まあり黒塚まままらるる中ま柏の本まは

今まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

まらるるのまらるる系ハ黒塚ま鬼こりまらるるまは

義徑
腰うけ
松



○ 志のまじりり石の福徳のゆゑあふく樹の上のやうなる山のふ
 中より其さうに紫ふくく熱体若むせう或人のまをたう
 此やうよりまの志のまじりり石とく見物なりしと國司の命
 ありて今さらまをえらるやさんや何とく名聞ならんとく又
 くらばしとくや流ふ其流るまことまのぶの石のむしとまのつ
 よこそ

○ 枕流の丸山の古城の石のたつと川より見まうと山
 峰の大本戸の流の上の氷龜より坂のたけあり是即文治五年
 瑞戸を即赤樹討死の古跡なり

○ 甲胃堂の本戸の氷谷川のやうにありと枕流次信忠信二人の女房
 甲胃と若せし本像と安曇氏
 向石名産の紙ありまの草系と此やうなり

甲曹堂



貞操をよりの
のまかりし人
其武を失りて
ふりしの不届
女主人は
これ孰とや
ふかりて

○その町の関は大河原のゆゑあり

○掘り本をわたり関より山町より北は又河原本方り是を以て朝朝奥州に城
の附此本の下は橋本二ツをこえて橋本又折敷ありしと云と

○武隈明神又竹駒明神といふ掘り本の東は岩瀬の宿に西は河原宿に
因法師奥州致枕の坊より神童竹馬よまきより出帆の門で往同と同言
いより神号よぶより又宝窟山竹駒寺といふ宝窟の社傳あり是即
因の兩基方りといふ甚信用一が竹駒武隈の訛傳あり其説久し

○武隈の松或は二本の松といふはこれ松といふ明神の傍に二丁をり武隈の松中
よりあり此松の東は河原の宿に西は河原宿にありは昔阿武隈宿といふ宿國乃人守宿
宿に終るを方り源満仲源平之友原元良宿道貞友永範永源若義永宿
被被は宿にいへりや即この松に元良宿國の時被被は宿にいへり後再宿國
年より下向の宿の秋よ

其後若義宿國の時被被は宿にいへり人のみとて是と伝く被被は宿にいへり其
依は被被は宿にいへり奇の事と云ふは今の宿の樹に後人の被被は宿にいへり其
被被は宿にいへり其被被は宿にいへり其被被は宿にいへり其被被は宿にいへり
して地と二尺半より二尺より凡そ元として天と傳へ被被は宿にいへり其被被は宿にいへり

蕉翁
 東奥よ
 糸脚は

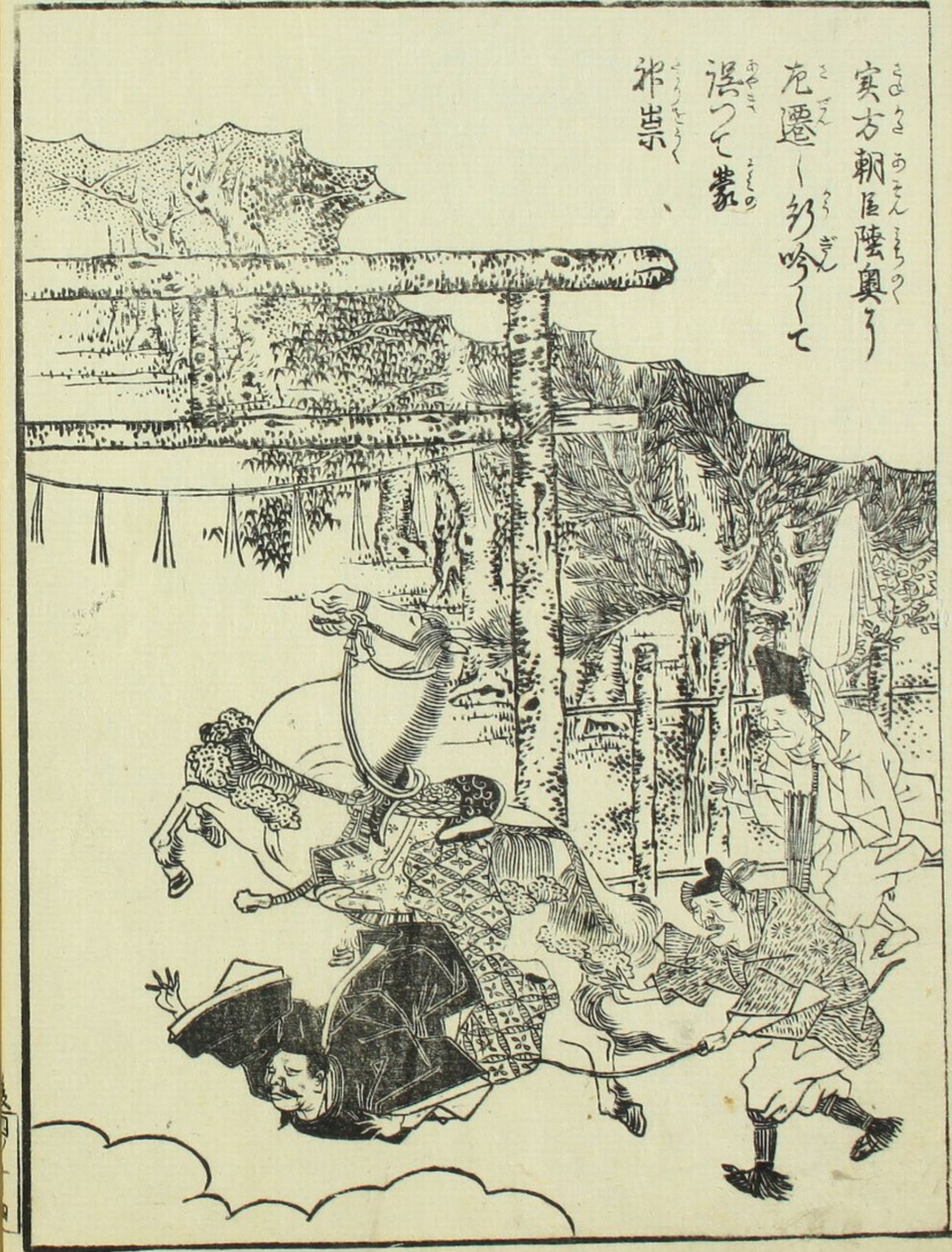


いけくまに松二本を都人いけくまに本とくまに
 武隈のまらとけは後にもまらとせと種てや我のまらと
 芭蕉翁の碑の岩石より一里をうり西美とよる松花の名をありて其の中
 五里其文云

笠沓の里へ入ると後中の方の塚のつくりを中んと人々といふ
 有るも山さきの里をそのまらとよる松花の中へありて其の中
 今よりとゆけくまの又月雨といふとゆけくまの松花の
 唯中へてはるまは論論まらとよる月雨の松花の
 入るまらとよる月雨の松花の

○後中の方の塚のつくりを中んと人々といふ
 うし海へはるまは論論まらとよる月雨の松花の
 芭蕉翁のまらとよる月雨の松花の
 の松花のまらとよる月雨の松花の
 氏代くまらとよる月雨の松花の
 家に古くはるまは論論まらとよる月雨の松花の
 酒度方よりまらとよる月雨の松花の
 柳中の方の朝よりまらとよる月雨の松花の
 武隈のまらとよる月雨の松花の

実方朝臣陸奥へ
 元遷一幼吟して
 滯つて蒙
 非崇

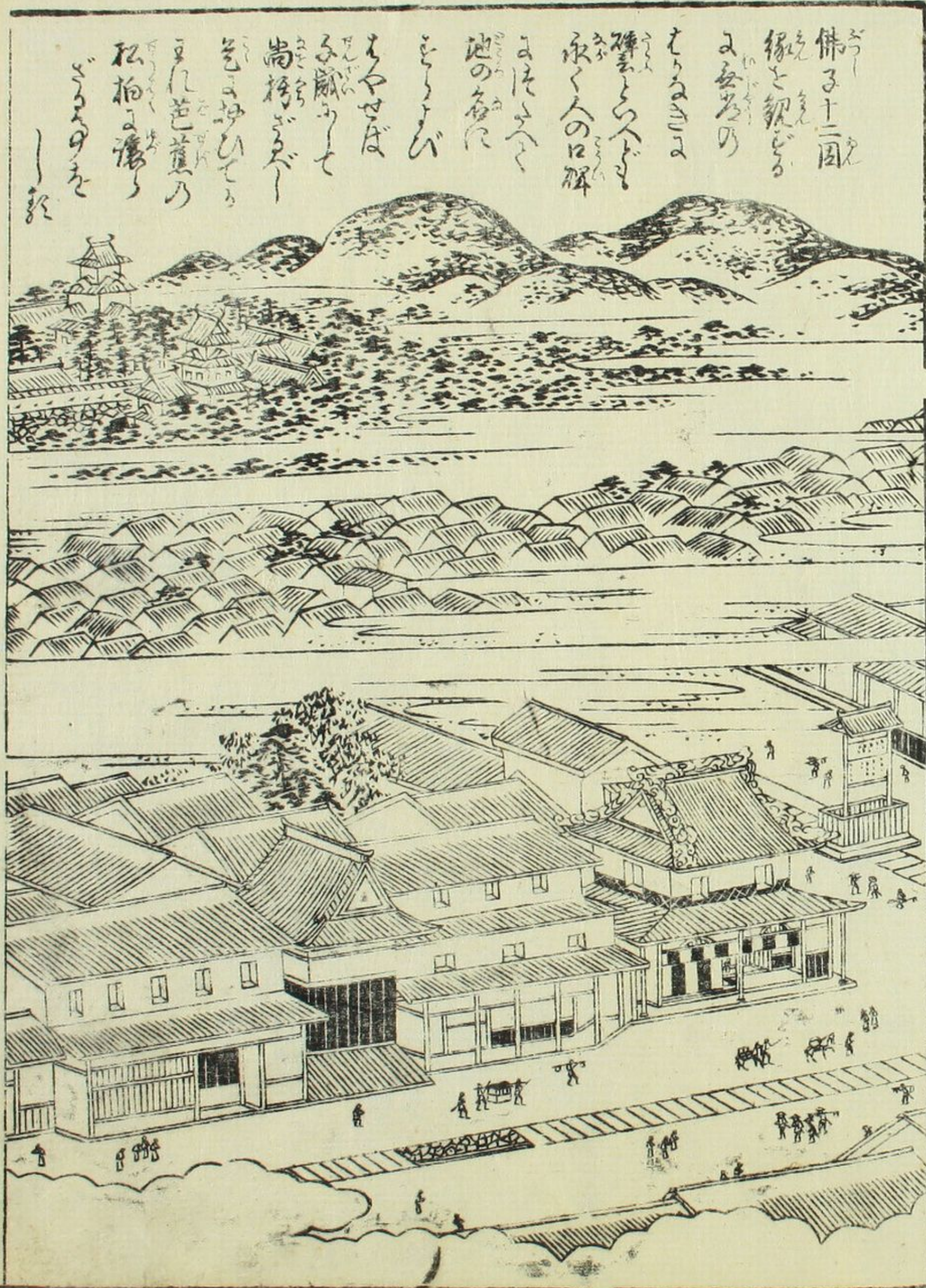


温柔の人うれが其まゝ冠をとりあげ發うまひびてさつらぬ折よし
 てなされしを帝道と敬覽はしつゝ幼成の優美を賞し一実方の無念を
 要し給ひ其方こそ秋まろし見てまろしとく陸奥守と但せらるる美の
 阿こやのねを易し得に其附界殿作とて一即附と勅命ありしういやは心
 せしびとまろしのれあこやのねもまろしとく入るるこゝれたまは此地は易
 さまよひ給ひしげし不の石祖神の物とがし一終入附作れりし里人まろし
 此れいゝ下馬の馬はしとこむまろしと元来武骨の殿うれは早まのけはさ
 阿まの幼終人まろしと華表の末れあるやいふ石とさ常の馬蹴入りし
 重い大地まろしと母ら馬の其まゝ倒し給ひ神野のわどど母をばしきかくて里
 人まろしとまろしは痛りしけしきまろしとて三田まろしとて終は長徳に事
 二月十二日申敷又十八歳うて玉女の内をうまのまろしとて都路の務を
 兼給へ里人まろしとて其後まろしとて其後まろしとて其後まろしとて
 今阿る石の台候なりとて西行法師東國の脚りおろしとて長徳に類きて
 一樹をせば其の石まろしとて其後まろしとて其後まろしとて其後まろしとて
 〇名を川大河なり性若橋の長と百二八間ありとて中おの塚より五又欄
 出懸控臺を経て東の方ありしりし此地の石を乃女との人若ありし無慮
 怪の懸て又諸とてその多事なりしが若て此やろしとて志願神はしりし
 けんとし此とて相を立ててこれを勅旨に懸けしとて即今の石の

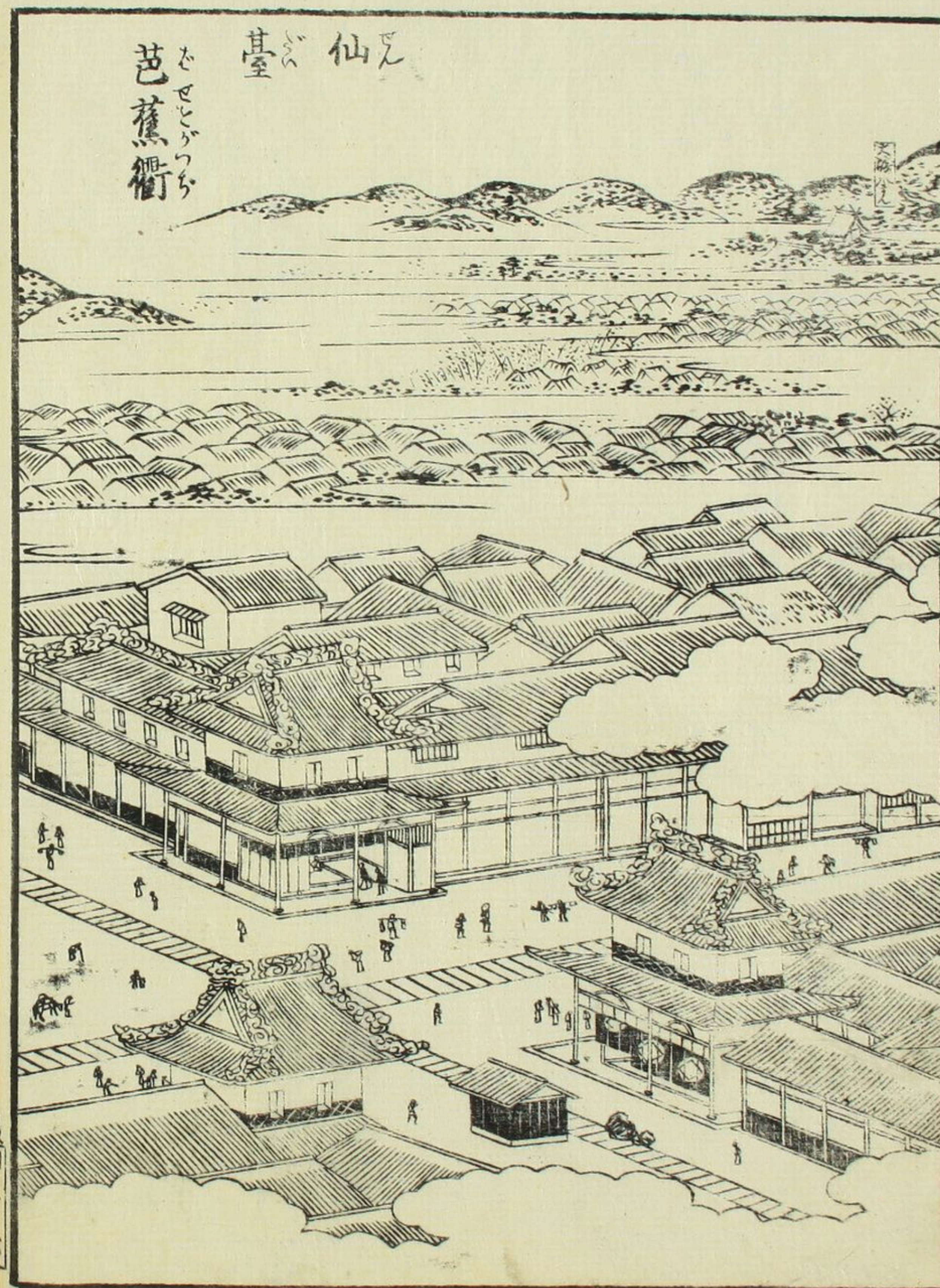


源二 位 赤衛 を 追 依 一 七 名 門 系 附 藤 台 石

此の地方に名所の祠あり
 藤原よりとて名を名川に名 して名川にあり
 右幕下れ朝神戸赤衛を追依の祠あり
 一よりとて名川のへくさ名川にあり
 とありしは藤原景時よりあり
 君と名川とて名川にあり
 ○ 理本阿武深川がよき谷せぬと其ののたうよんたうのたう「名川」の事
 中田より入る地よりいふも理本とて流し出るのたうあり人たましくこれを得るは
 玉の流し出るのたう「或は香炭は」してこれを名川にあり
 名川本理ありやよき其質玉のたう
 名川より長岡藤と藤原川へかむへりて名川にあり仙臺府のたう
 ○ 藤原山仙臺あり藤原藤原として削成たり「名川」のたう 往古仙の山
 一にて附く仙人松崎とて名川にありとてやあり地名仙臺とよぶとて
 此地の藤原なる人家のたう「きまは帝都は名川」
 ○ 芭蕉が過つたるのたう「此の名川は名川」のたう「名川」のたう
 のたう「芭蕉とて名川にあり」其根漸ひるより夏天下は緑系街衢といふたう
 其昔歌ありしとてよき其名川にありとて



佛子十二圓
 縁と観じふ
 又玄名の
 ちりなきよ
 碑とく人とも
 承く人の口碑
 又たふく
 池の存た
 ともよび
 ちやせは
 子蔵あして
 尚標さぶ
 ちよひて
 五几芭蕉乃
 松柏と流
 ちんりそ
 一終



仙元
 臺
 芭蕉衢
 ちせじがつか

二十日軍第十一番鷹聖人上足無る信又徳説法利生れを
跡たり

其後足心是國源海尊空
えとあついで法蓮を設け化益ありし所の靈場也

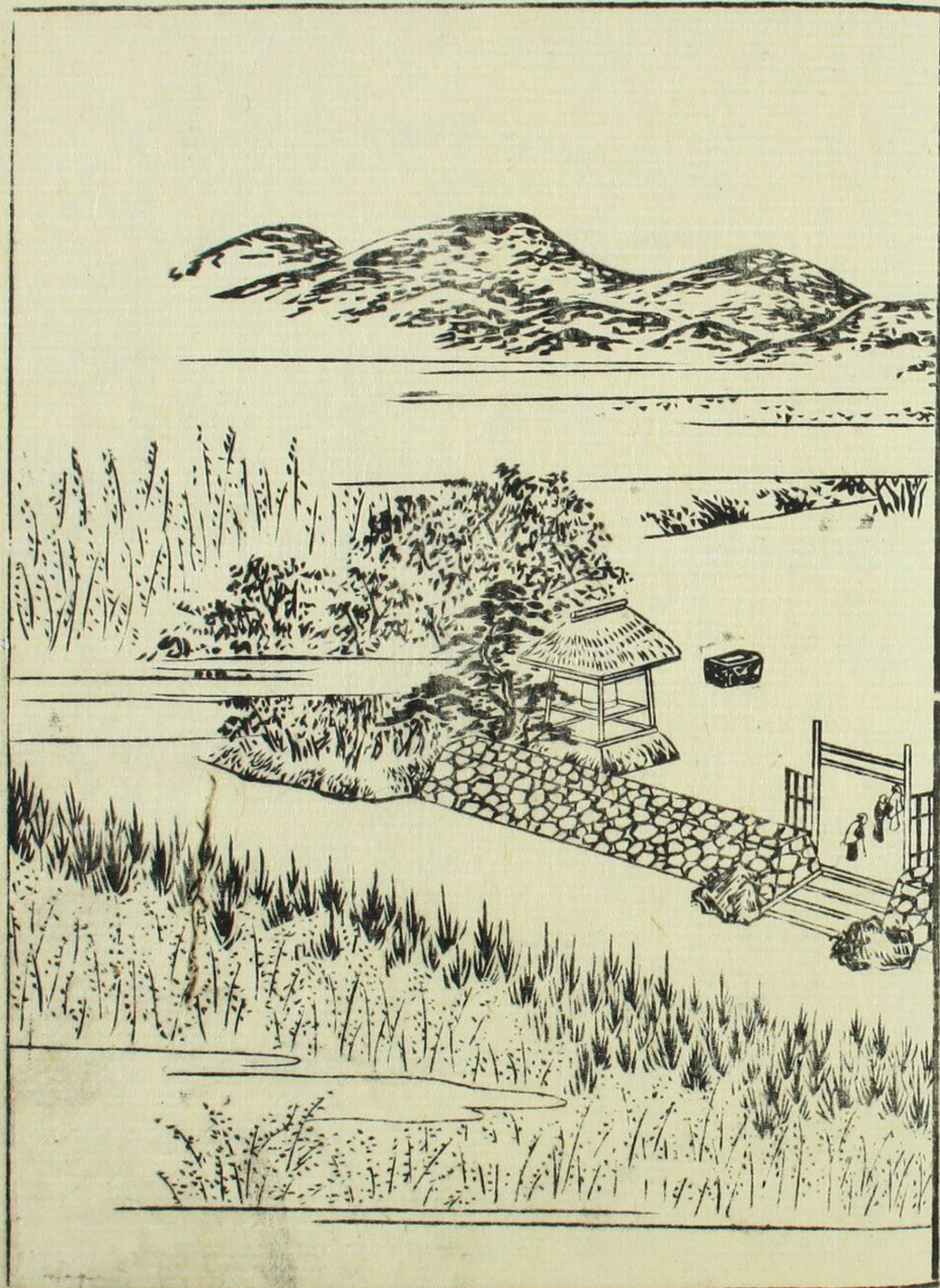
元以後より山嶽荒れまく山流り橋岡山が折去院と号して開基する信房とやハ人五三十一
代敏達天皇に世の苗孫危古橋満兄心縁乃系漸回造の城を橋民郡が海老乃常州
輪田に於いて吾人の所并子あり山園に化養一終之弘基二年三月十日法曆八十一歳なりて世
を去るに云々 其後吾る信寺の系下道跡橋の傍にこれを枝と云俗姓の藤原入教の
系曆云々 祖語セリ

○宮城郡國分町より東の方躰踏が岡を云釋迦寺より南へ國分寺の比るを

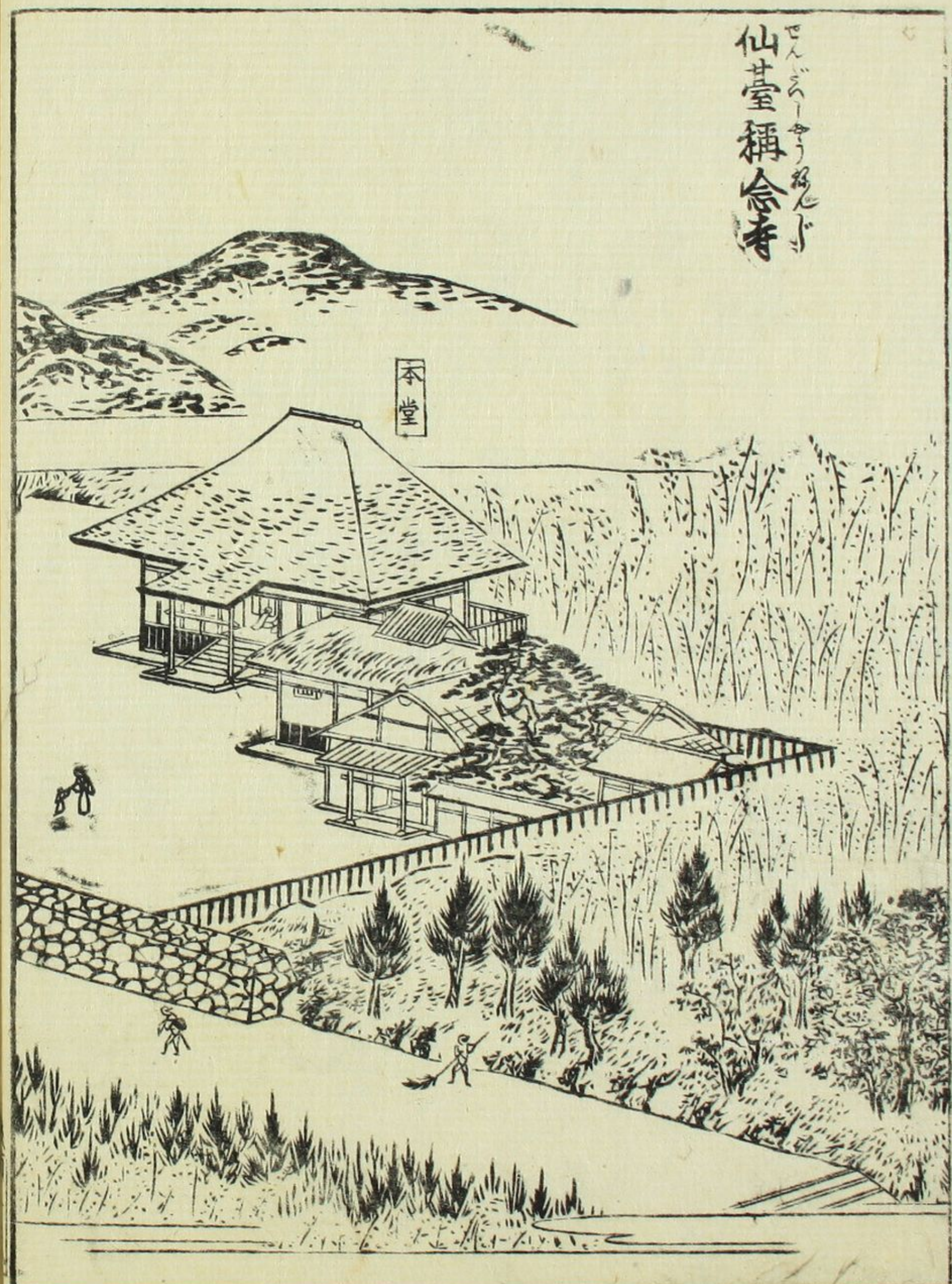
右へ出づる所の廢地也是方り此所の名物也とあり此本萩と云い今其本萩
てて法蓮の比に唯其種々々仙府の人家に栽培して二株と云ふもの
なり○秋萩の石枝又咲く花と云い此とよめる萩を我人難トクふこと人々
此萩のゆかり萩と云宮城郡の本萩なり萩萩はけりけりなりと云い此本
なり秋毎又梢と云い其枝を生じて其枝又花咲けり此と云ふ萩のゆかり
ゆかり本萩とはけりなりと云い此のゆかり萩と云い此のゆかり萩なり

る仲より人眞州の任りそのけりと云ふ所此萩を長橋十二谷入りて登りし
る系より入る日人何きこと見んとも二系大沼又集り此のゆかり萩
と云ふ所と云いと云い此花のゆかりのゆかりと云い此本萩と云い此
小松よりありて萩と云い此
宮城郡元河り此本萩露を云風と云い此と云い此
是より遠谷にありと云い此小松が池地田の玉川後終橋末の松山より此
石のゆかり名勝をさうりて萩を八橋通りと云い其迂回方り又原町と云い此
此直に鹽竈へありて捷徑と云い此小松が池地田の常と云い此と云い此
其青観なり

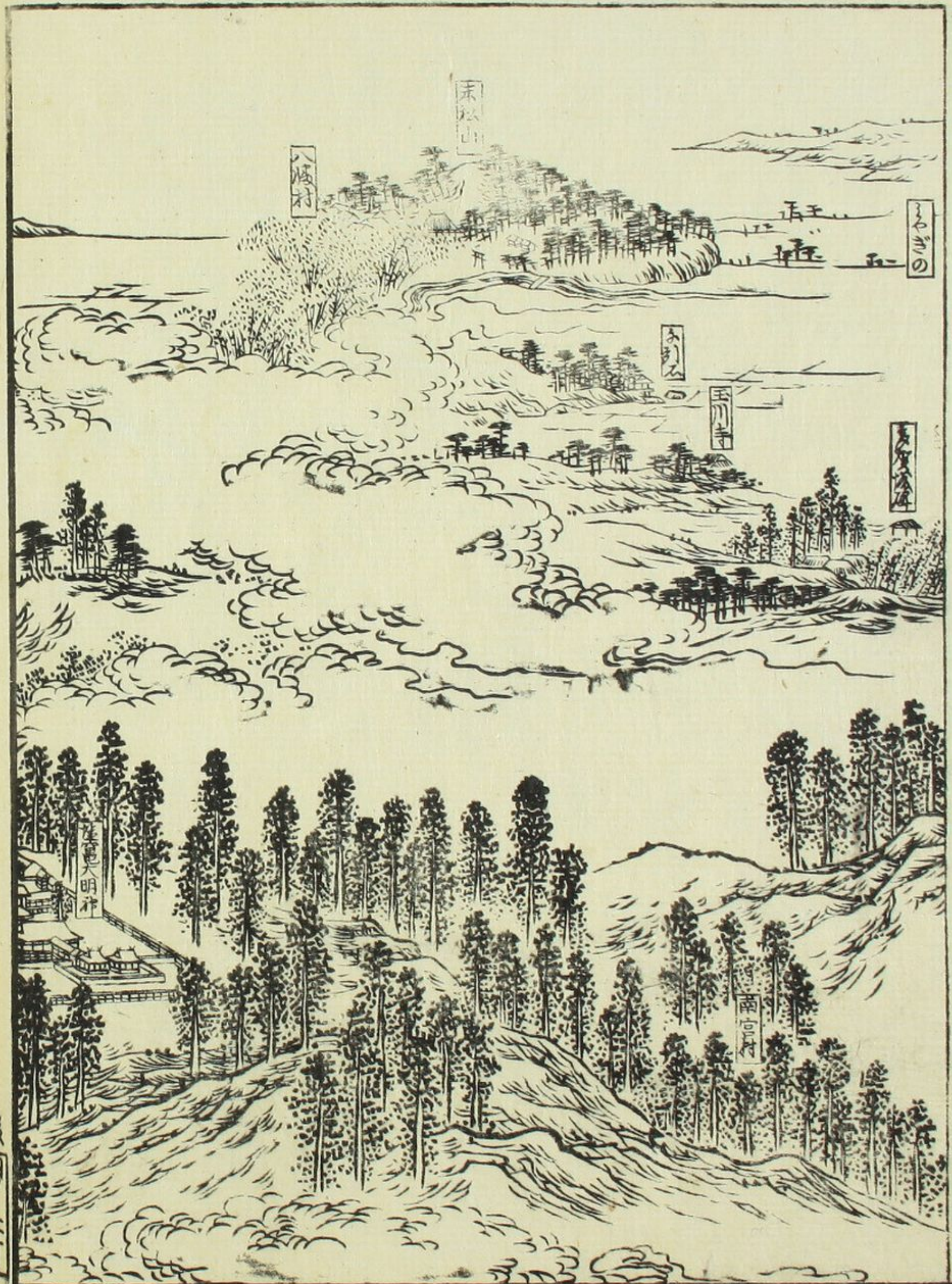
○臺の石牌へ示所より今市よ此と云ふ所の橋奥の細りと終て終て此山より十有
の麓臺の石牌あり其甚なり此石牌へ此と云い此と云い此と云い此と云い此
蓋近末大路の傍に南都の臺近古梅園方り若標石をえて人始りて此と云い此
と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此
隔三天と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此
城の碑と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此
城と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此
惠美朝獲被城と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此
と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此と云い此



仙人の寺
仙臺稱念寺

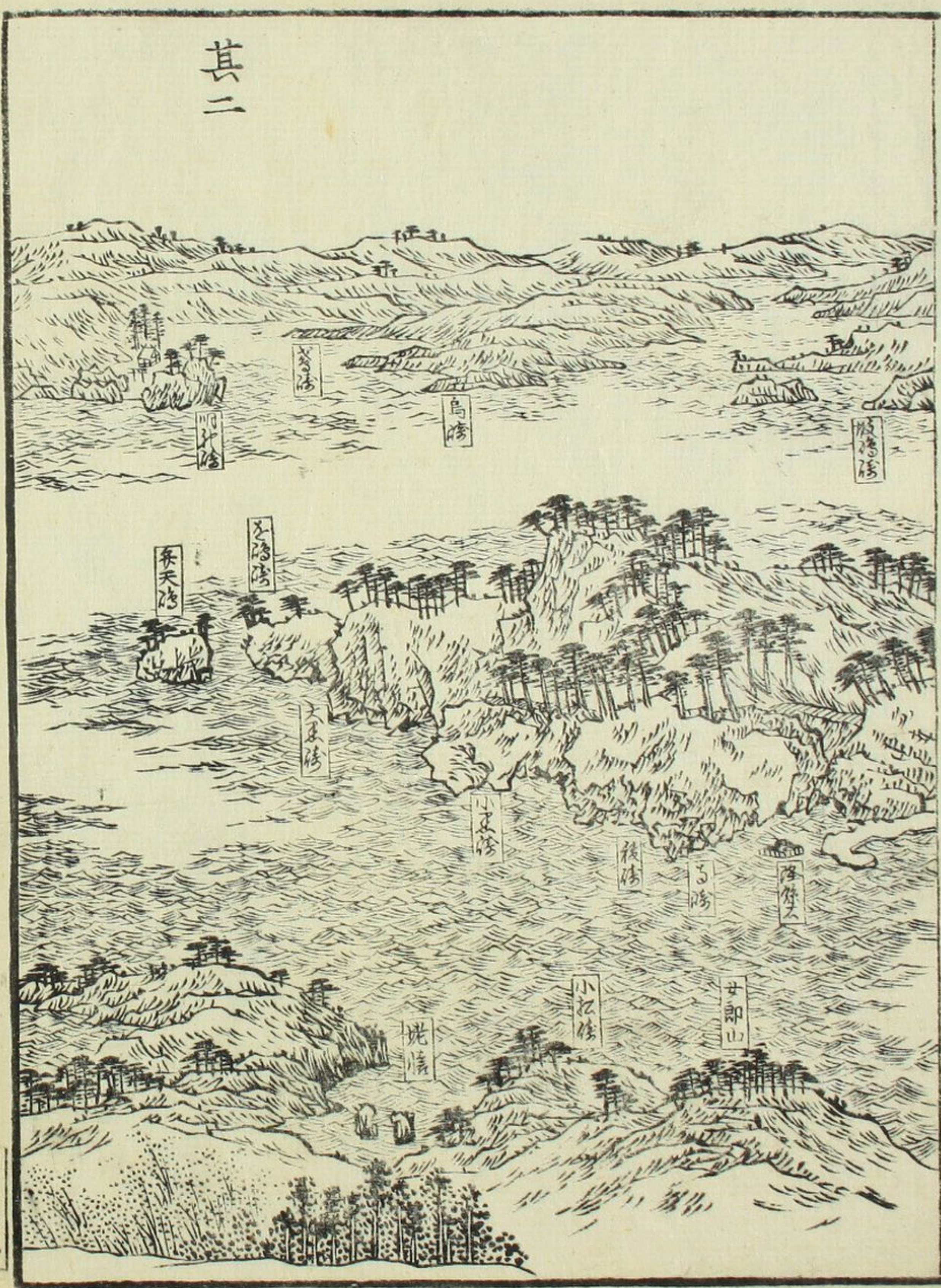


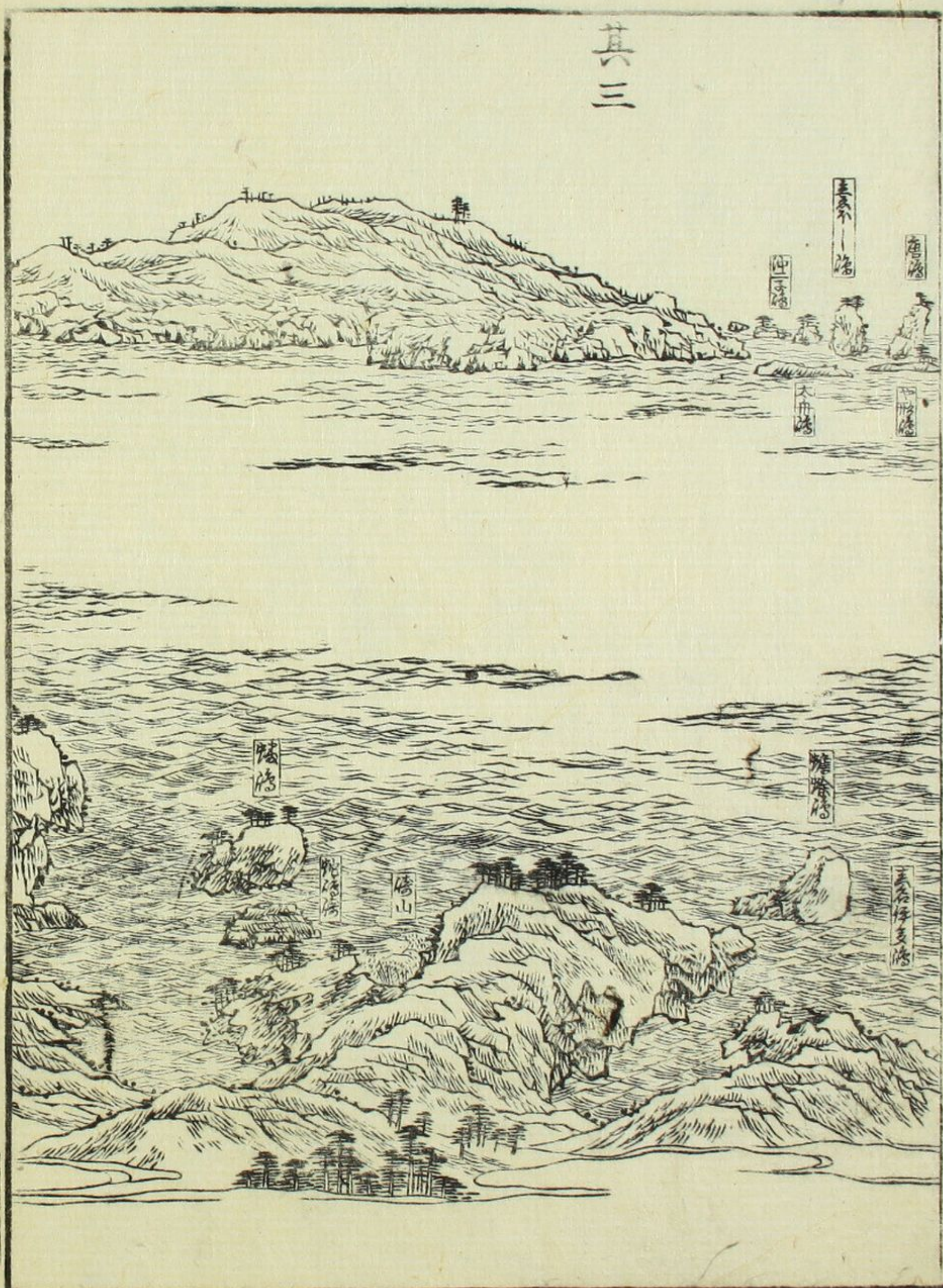
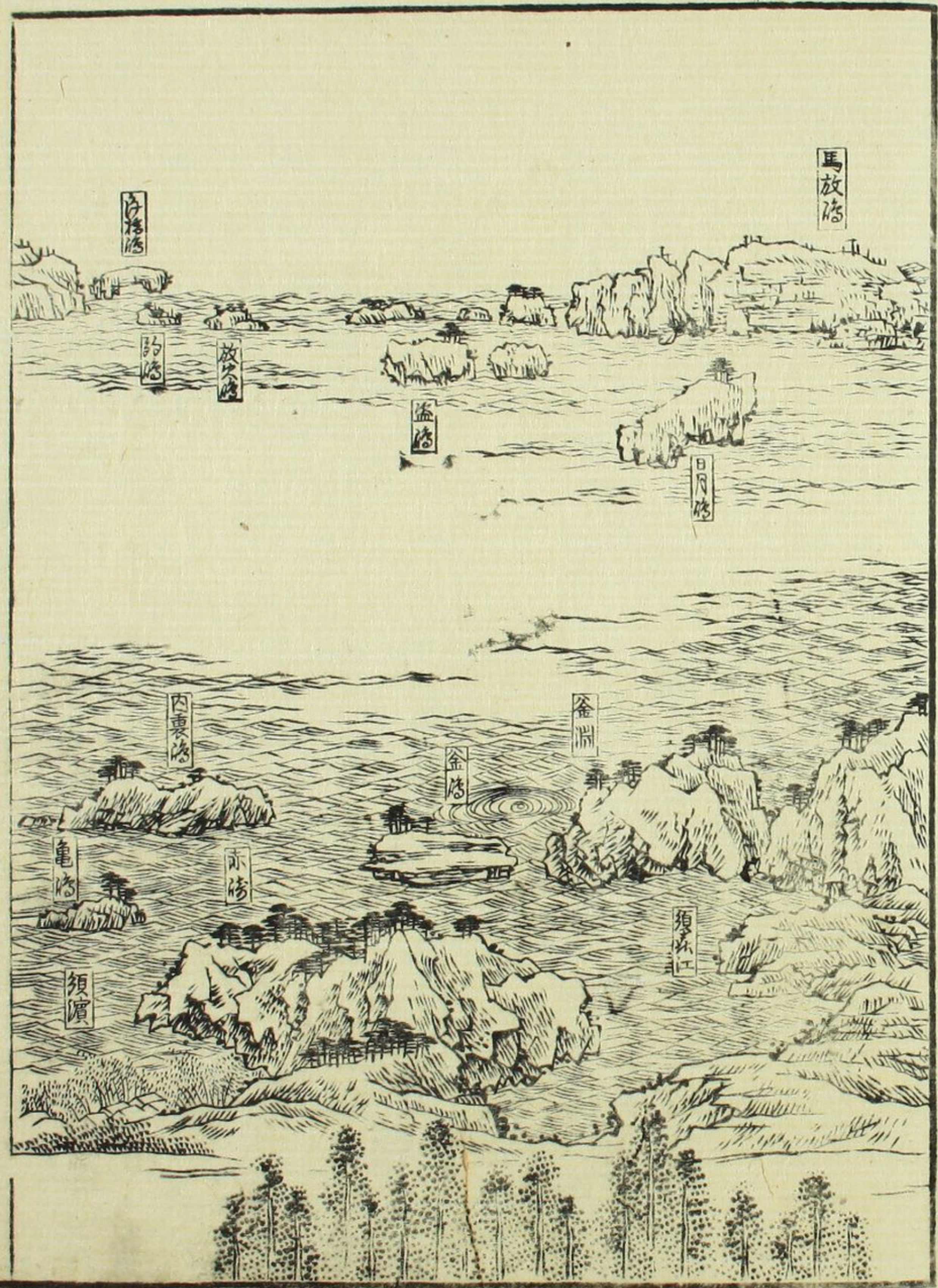
其一 松尾全図





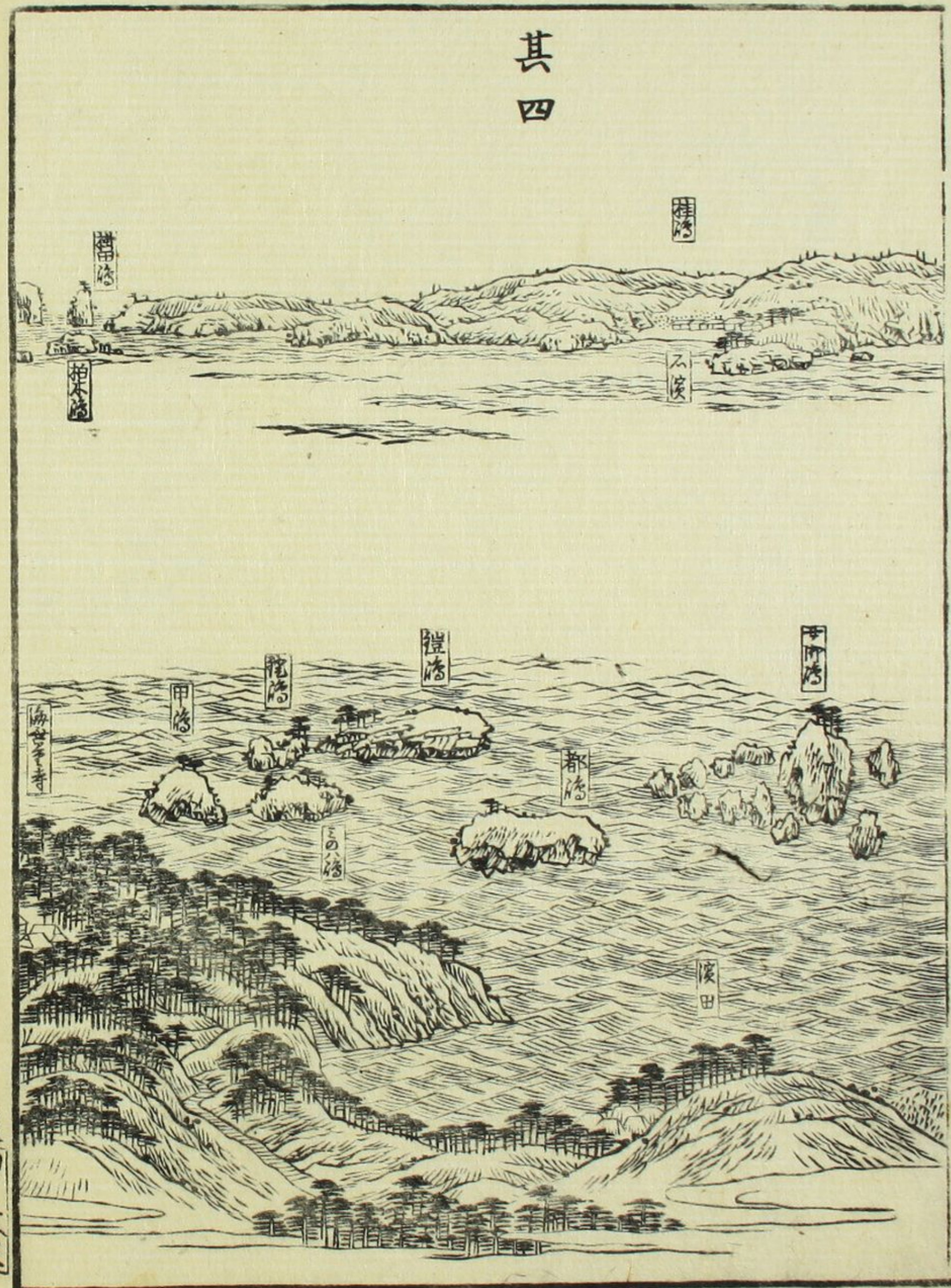
其二

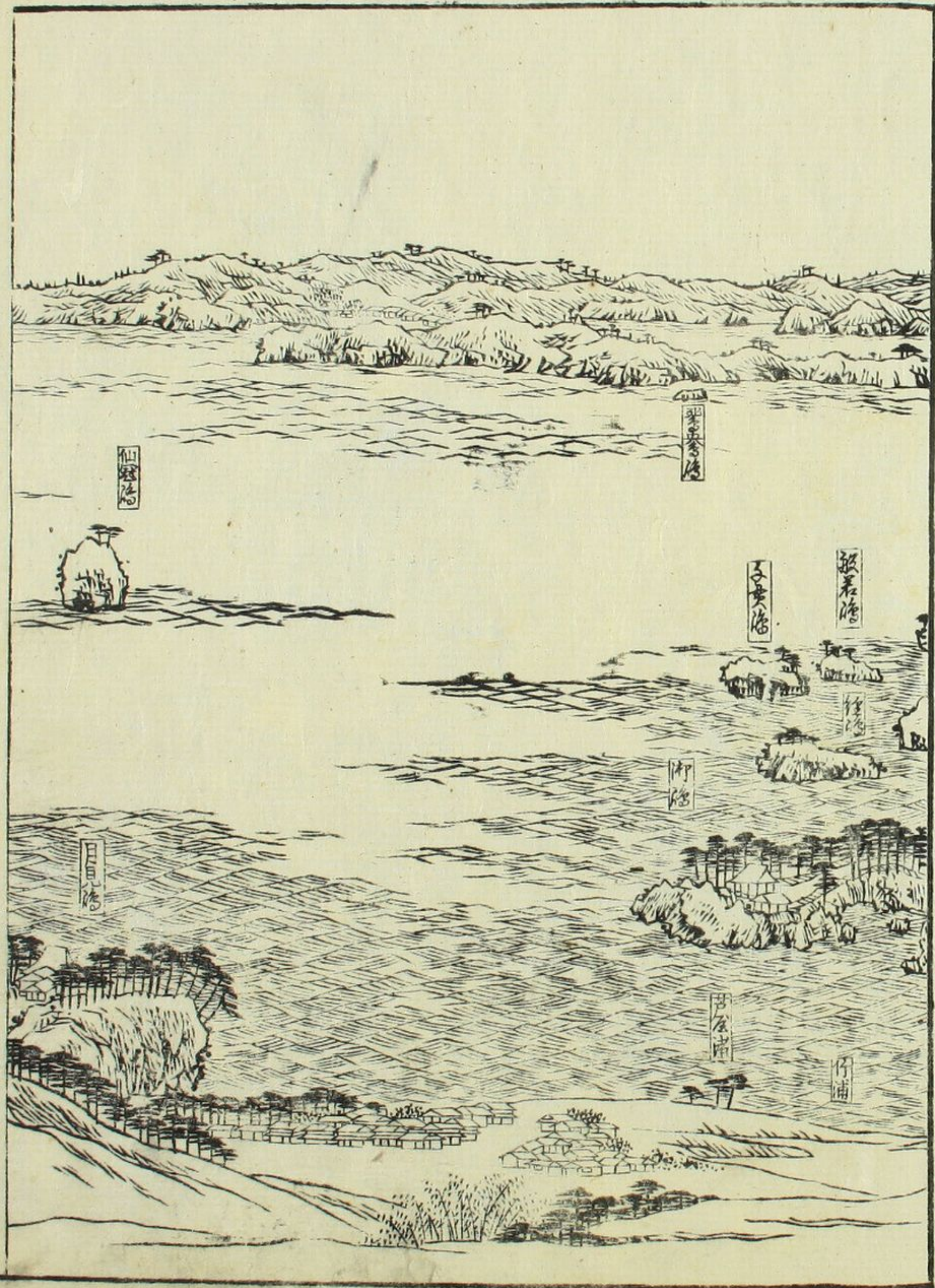




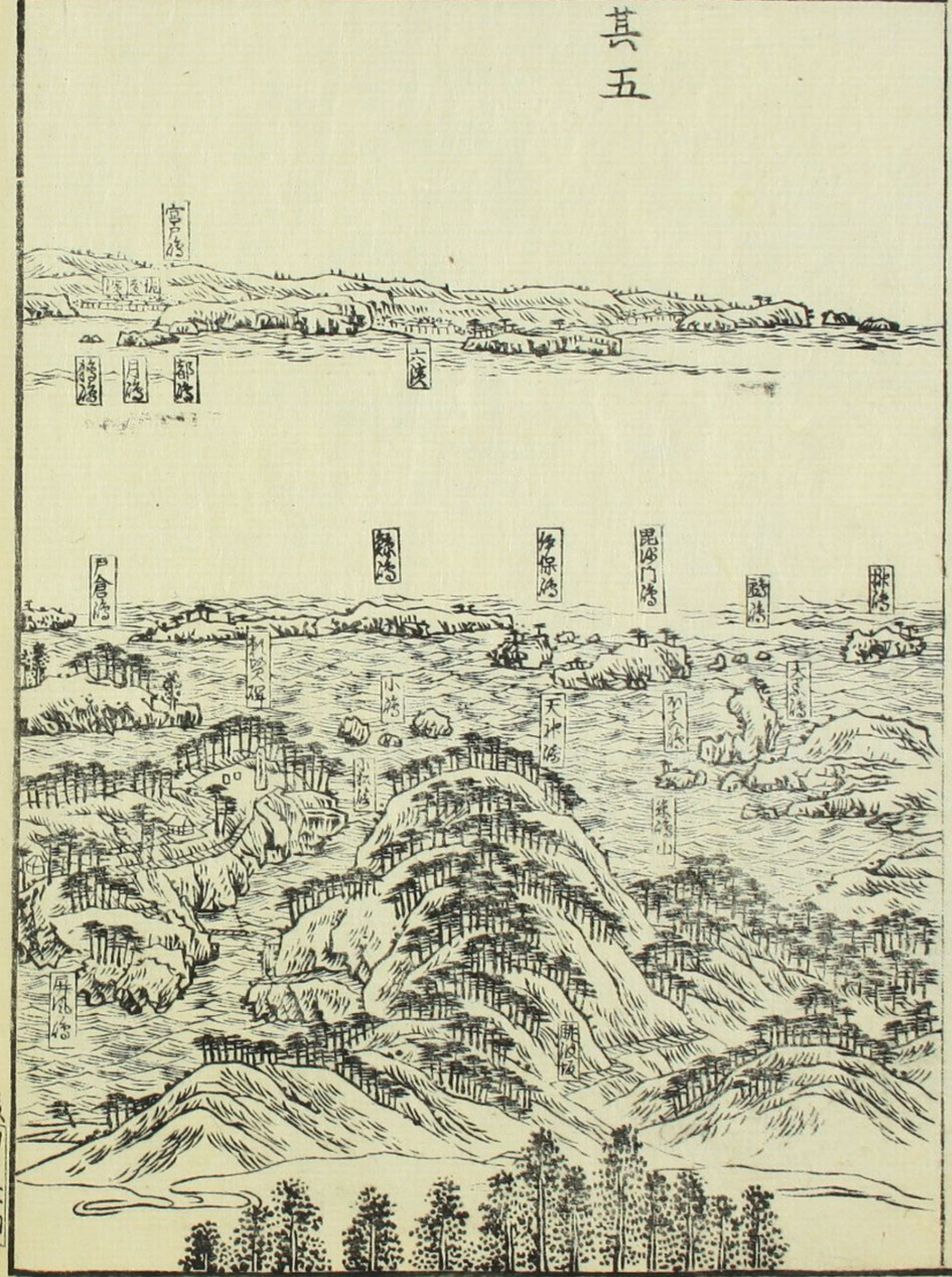


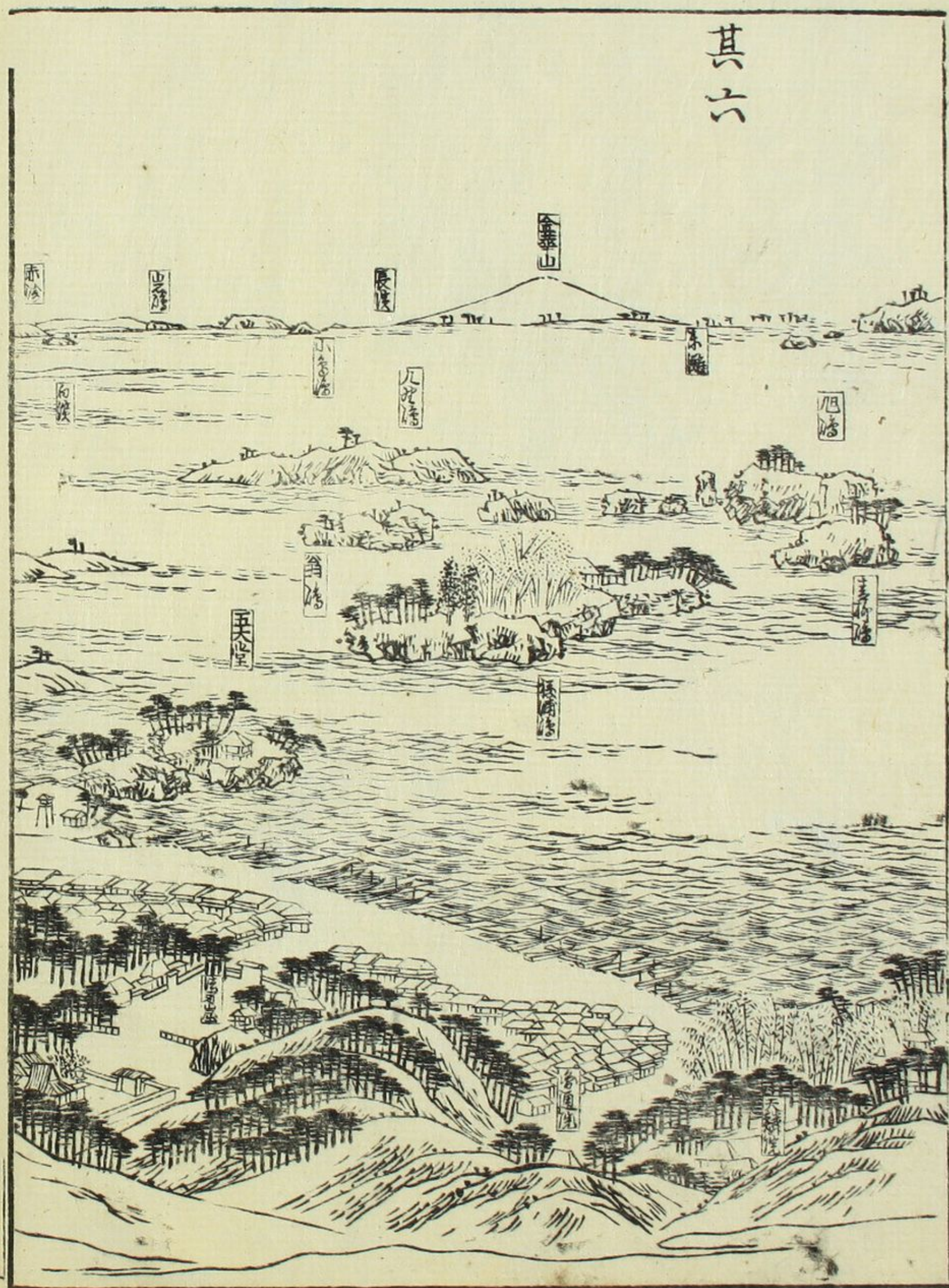
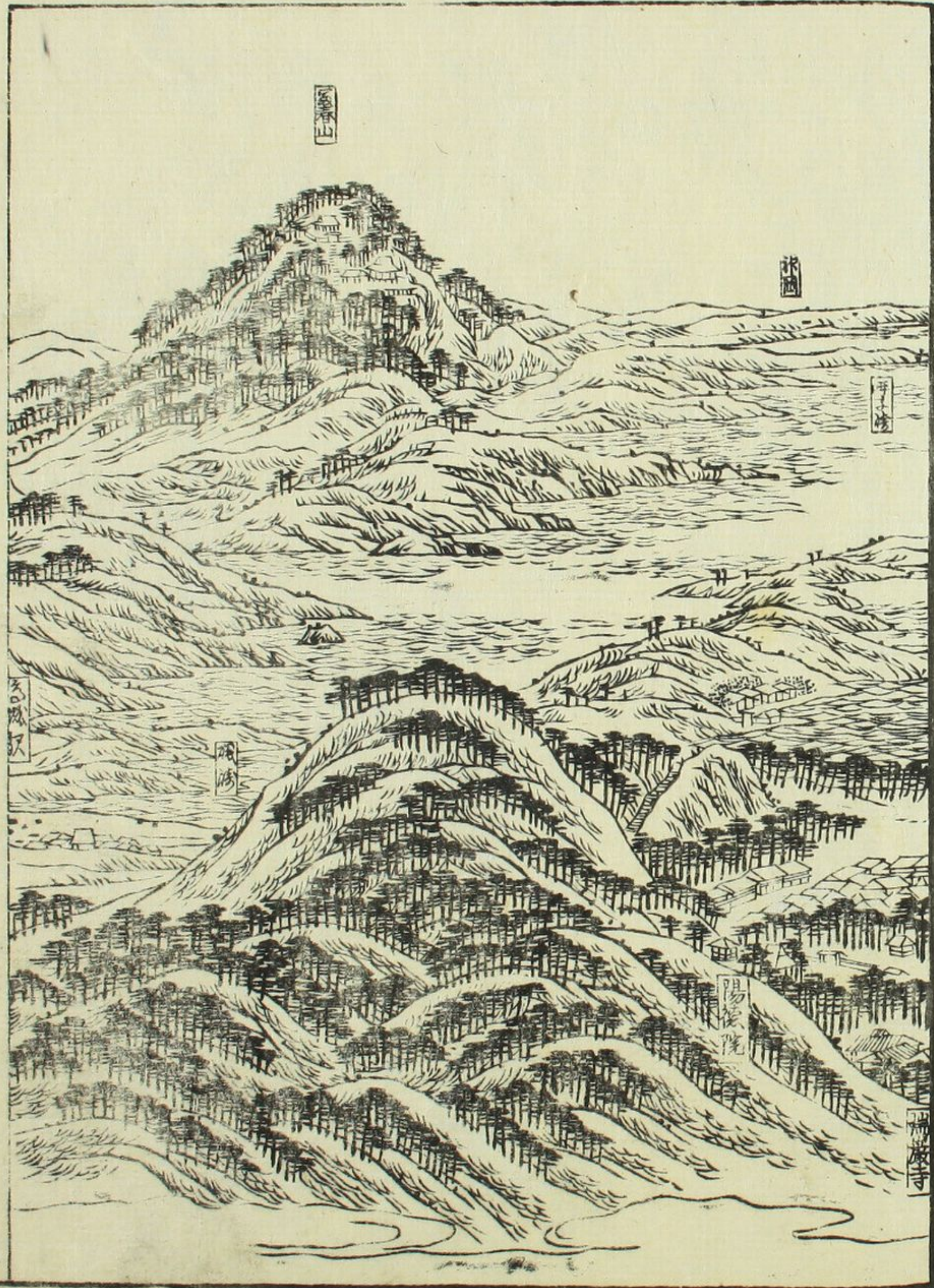
其四





其五





用基寺

秋三つれまがれが海の無きを哀れん入ぬり此陸登
つら降りつるまをくん松崎や雄嶺を渡り何と云 後五

○瑞岩寺に松崎寺と号し通寺乃用祖法身和尚の一人常州其後氏乃
平に即ち入る武ま方りしが石の不遇を感愍し出家道世しく終
入海し經山の空室は若くは十一ヶ年降朝の後最明寺に入付
と降依せらるる山を用基と云其偈云

遠登往山分月 還披因縁大道場 法身透得無二物 本是直壁平に即
方丈庫裏の塔構凌子の画に皆附の名工をさそひ令殿樓閣きらびや
二十三の塔既遷をたぐり萩殿いん方は 法身窟の熱門のちあろ月
見添ふありこれ若くは明寺なる諸國の脚の杉より危難を避らば

○其後後後想國師此窟中よ抄して天台止觀を講以と云 雄嶺一柳
松とも日本武蔵の松をそそせ終入をたてのくつを崎上妙光房の見佛
上人の用基方り 松賢和尚の碑あり文のひき書くと元僧寧一山の松氏
不之 松吟庵日雄崎よりあり芭蕉の碑と云其石面

朝よとを多きまのしを所り海

○西のりりの松崎山へ入るはあり又西のりり
其法俗と通るれば思ふ

○燕澤の碑仙基と松崎の洞あり其文字者畧あり 後若嶺方り
修人云弘安に年夏元人我國に流世と記し松風忽記のく十乃軍兵の
うろく西海に沈没せし其比降化の傍禪念園是寺の用基佛光
禪師我父母の國方りをたてこれをいそむ三ヶ年秋彼岸の目此碑と
きて己妻の靈を吊らんとするを之れと記し我朝よみそ其妻を
らまにせび文字を者畧して人よと記しりた

○金華山の松崎の山あり海濱とも云ふ此山は難不之不滑らら乃
く山よ金華と云ふ此山は此山あり小持禪より名年禪と經
て石巻よ此地奥海の一都會方り又先より何よりして經書よ
いり終に相川の山と云ふ此山は此山に金華山へまらるの海は方り
海の舟一艘のきり山上よ小舟一軒ありて是と可く先よ
とら付の嶺上の鐘を鳴らし相國をいせば即彼不よりいりて鐘
を撞く其後松を出れを女人を撞く書六つより後海と終に山に
地より鐘二百丁より海の上よ空元とて令聖の峯天外と鐘へり
其形令く龜の脊と蓮葉を負ふんがとく又云此仙のりり地と云
高に十八丁周三十六里八十八谷三百八十丁の洞窟あり頂上の天龍宮
東南の方後海と云ふ難不之をさうて八角の水晶石あり高十圍り
十三畧とて山第一の奇觀方り 松又此海危の產物金海龍金砂を

會ひを以て其勝と云ふ事なりと云ふ事あり一山と云ふことあり
依るるが如し其本まをりて只なりは石塔寺狀異なりと云ふ
本宮辨々天を安んず別處に金尊を言ふてむしは後院十八房を
しとぞ我國の附屬と表微せしを天正年中長後と入る傍これを中興
と云ふ

○一の國令華山よりいづこりて綿の系より如加美川と云ふる入る樹石
へ出る一の國に即海を能くし夜川の東南あり

○平泉一の國の西方より是即泉三郎忠樹が城址なり

○夜川平泉の北より水源の粟山修治志の源と云ふなり
此水夜川に合せり此川の中の流れは武志坊并茶が五柱せり石と云ふ
乃松あり此地いづこり夜の國と云ふ

此川上は遠谷窟と云ふなり村昔をりゆと云ふ地へ一に要法王亦以る此三人と云
ゆして下は此の堰美なるなりと云ふ既して後河國まで美の川に上りて上田村丸敷と云
して退休し終つて不入退く一城後を悉く討てしめしめし其後正隆年中
此窟中へ堂をかま毘沙門有餘津と云ふ一塔ありと云ふと美鏡山西光寺と云

○高鏡夜川の十一の國の北より此村昔と云ふなり一に嘉祥寺因隆寺の南へ門
泉水築山と云ふなり此の所石柳の所なるなり其郭地最北にして年々耕植の所
と云ふ

と穿も或は人の家居りぬと云ふ故に成るるなり夏野や兵のりが是の所と
と云ふしと云ふいづこりてありなり

石森山を折言す

東流流家

日國若手郎南都
其國の城なり

重願院と号し二十に輩第十番是信大徳の用基なり○本堂十二間に
方本尊阿彌陀如來 惠心坊 却の地 偕既に坊あり

尚山の用基是信房と云ふ以の四吉田大納言信明卿と云ふ及原氏の被後
孝と坐して悟り此の若州と云ふ所なり此の母は「乃か故て勅免
何門と降清と云ふと云ふ」風と云ふ感と云ふありてと云ふ中へ又安樂
乃のりとも老若美徳の差別なく曾て帝ありは「我今たそい勅免を
ふてび雲のこよ登り」氣死れ身と云ふと云ふと云ふ常の風と云ふ朝と云ふ
ろやされが今日の歡樂の法慈と云ふと云ふと云ふ明日の阿鼻の大燄と云ふと云ふ一期
乃大が今此時なりが承く人間乃は「さうをたら海く書掲の」と云ふと云ふ

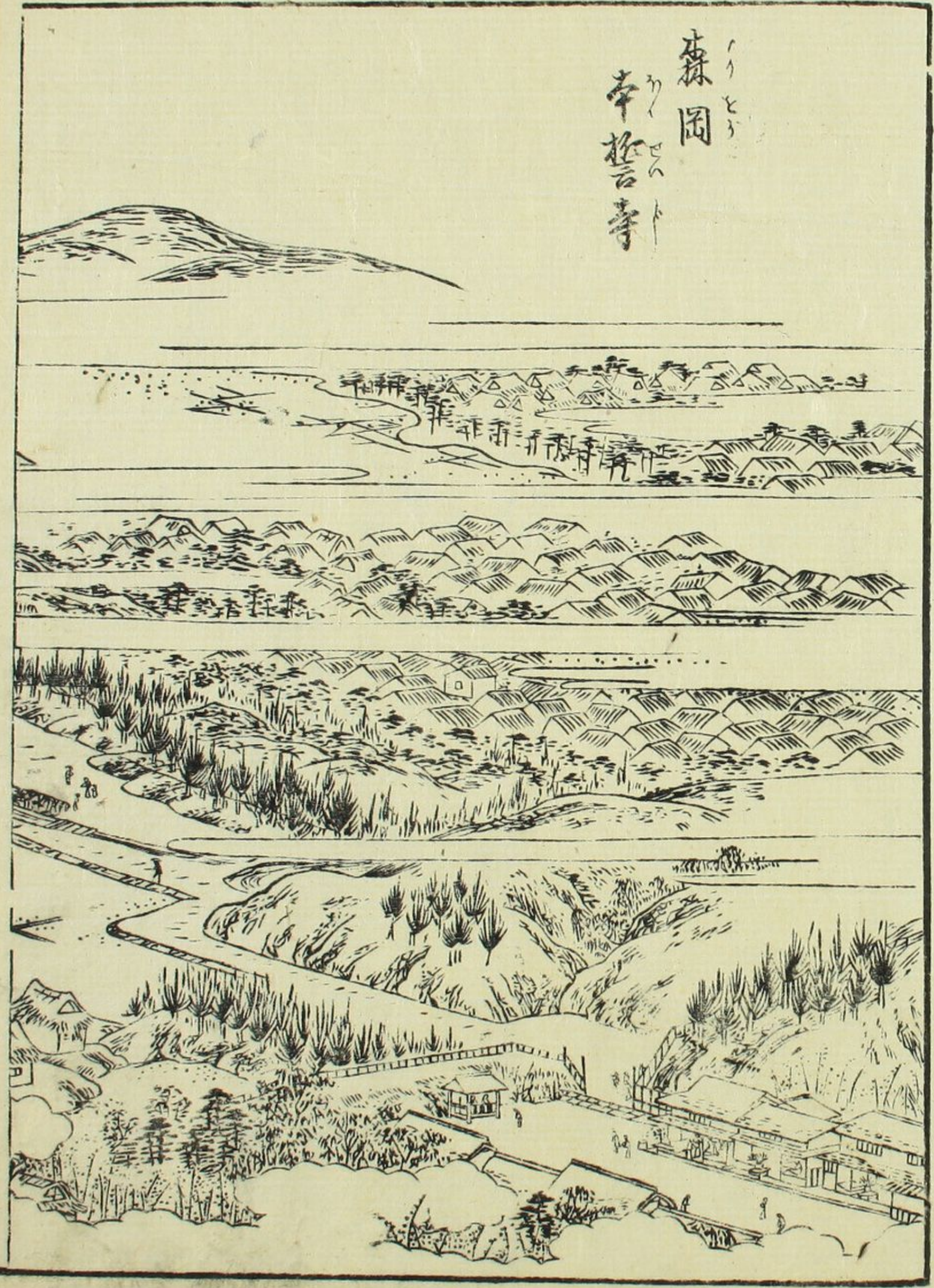


即降法をそまうてあけくは知識の値遇をりあらるる或疾曉に及んで石
思議の靈友ありま夜の童を枕上よりして唯何となく

州へ若信の聖世も出て常州の法のもるごとく

とくく入りく三及まぐ吟とつづくともちくせより信明
忽ら寝き寤くはくくくと秋の心を素どる小をへりたまこの聖
とは真名なるごとく若信聖とんよときいこはこれ常陸國とまなり
若信聖人とも大知識はしつと末世の衆と教存はし終ふとつ
靈者なるごとくと感涙をろよとつよもと夜ふりたよと出く常陸
こそいねきたり是即信明が宿因縁達の耐なるよと靈者にまうせて彼
地よりつる宿坊ふと里人とも言へる其若信と申い即親聖人の
御幸を今程い進き此小碓乃郷はしつと専ら弘法教化をる
妙の識よる難き知識とて人皆如来の御再誕とこそ申はるといふ

森岡
本誓寺





信明いよく奇異れおひとほしとよ小治の里より聖人は渴くを
そ何れ大誓の悲願して我多うたの凡愚をい出離のるよいそか
修ひ門下れ末席よりし加へ給りまじと渴仰の候りらこよおまじ
る小聖人も渠が愛心一朝のゆえ何れぞんかめんが修ひ願地力
の要法尊念称名の正業をの末法五濁の悪世よあていま修ん下は
別く又若悪邪正の隔りしけ死の患難を助らんゆの自力聖通乃
善徳よてい永劫を經るも及ぶまはし爰も弥陀本願の地力よ末世
凡愚乃衆生をて降去よむ久給りんと万機普益のこのうられ唯一
よ阿弥陀佛の本願力よ降命よなりしよ又も修んるく佛恩報謝の
稱名忘るゆりくんば降去よ復せせんゆの大地とあてまのこざるが
とて念ごらぬ教守何れせ修ん信明陸喜れ洞よむせび何れも難や希や
悪業煩惱の此をよま一向よ降依り地力よまうせなれ此も助けぬ

なる河を願いうでうたのこあせざらん即信心獲得せうは河
舟子の列よ加へられ法名とて是信房とぞ揚りたり然しより以来
且夕聞法の利益を興りたる聖人は降して河給仕ありしりか聖
人はくく渠が信心の厚きと才の英れ凡らざることをこり修ひ
或時是信よ宣ふやま奥州の地よりや元来大國よりよ東山の隈も
夷よ播く一誠よ我日本の東極より其人物質朴うて修んるく専ら
自己の力をたのめて悍猪の妙いをまひる菓をのぼり編たり此を
て若し王化とよむの後やそれれ降死せり其邊鄙の村里よ門て
佛名とて知るものなく五戒を犯し五逆と修ひ自業自得の衆に
修んこれととるゆめさうびと何れも廣大無邊の佛願よ修ぬる
我修んるをさうる小即其人急ぎ彼地よ五誠真宗念佛の功德を
通ては我本懐を満るよ是よりとあさる小是信房の今さら修ん別

冠蓮の
尊像



なり聞法の遠とる瓜海く致きとまぐ固辞せらるるといふも聖人徳
 て命と終るが今の師命のまがう竟又別を告て奥州よこそ彼と
 たりかて苗圃斯波郡石森との地弘法の梵字を用き本教言寺と
 号し専ら教存をうらぐ易妙直入の法門をんが忽ら遠近の通信日
 疾の群集し是信大徳の化益と世の若其教をまはびのりたるやと
 一時に方々芳名高く極に隆て地邦又屈法せらるる教化のまはれた中
 に信州よはよりまはれ真宗有縁の者多しんが即彼地よ抄して一寺と
 祀立し弘法行くまなり
もとより松代本教寺之重人御真宗
 本教寺の願いこの松代は信宗也 然又文永三丙寅十月
 上旬の日より足信房柳遠例よはしませしが月中旬より日改水面要石脇
 あり念佛の誓のちよと大徳生をそ逆法ひき門身を打はとい徳
 慕波後の余茶毘の後送骨を拾ひくる本松との地よ是を納
 とらん嗣子相續して第十六世賢勝房寺誓の付よつとつ天正十八年

石が本坊より後移して今の森岡に遷すに云々○什宝宗祖聖人御自
他の肖像 此真像を人に十三歳の御容より信房御代奉の御自ら彫刻はし移し置たり
まうりまうり此處田原のまうりまうり此處田原のまうりまうり此處田原のまうりまうり

聖人真像画像の阿弥陀佛光明本十字八字泥筆の御名号 此真像を人に十三歳の御容より信房御代奉の御自ら彫刻はし移し置たり
まうりまうり此處田原のまうりまうり此處田原のまうりまうり此處田原のまうりまうり

彦部 光照寺 東儀

本誓言寺の塔改りて聖人の後牙信因房の遷跡あり
信因房の四右田大納言信明御の家居は原長尾清門尉是之信明
御とて人のおろし日ノ家居橋本他内より小法後して祀るに供給
急ぐりし其後信明常州小法と申ひく聖人の御牙子と申ひく

附 此を長尾清門と申す 長尾清門と申す小御牙子と申す法名は信因と稱す
又 此を長尾清門と申す 長尾清門と申す小御牙子と申す法名は信因と稱す
附信因及び他内ありし附 此を長尾清門と申す 長尾清門と申す小御牙子と申す法名は信因と稱す
文永二年三月廿五日終入寂其後彼他内も同く祀るに供まうりまうりその
子孫今も彦部村に連綿しつとぞ其餘ニテの塔改りて石塚ありて何事
什物も傳来し

○山岩の園又いまで森に此石園也 此石園也
○盛岡藩大御多七月十日より十六日まで三夜に同敷りた申ひく高きり
三日月の鏡松と構へた方多は二三或は三ツ小またり三ツ形松ありて何事
附より穴と懸し毛をお園と題目を掲げ諸士の面く申ひく花やうふ出まて



盛岡様火之國

武番の婦人を三九二百の人数をのこす馬とて彼樺火の中へ殺されて樺橋の
かたがらに下りてはしりて次弁火の傍らに限りて燃申し引をたりてあきの
機をばくの屯進郷の人民群集してを壯観たり後武門のたけりてはては物の
をとりては是のたけりては金屋を掃ける聖舎なりて

○奥のふと盛岡より後河の面よりぬる山なり

○今人の里神本隊街なり西へ山あり里あり取原う深く奥の兵男女とよ
かんとも文を中より人をさすは神本とてを尺をうけ本所まうは物と其ま
の門より入るはとてふ男はあはれなり又あはれとてふはあはれなり
てはとてふはとてふはとてふはとてふはとてふはとてふはとてふはとてふは
此里の女婦とて世にさす業とあはれ其神本のつらうたりる例なり

神本のまはらうこそはつたれたりの細布のひらりとや

毛のしりしと奥の外へ渡りてはあきの津煙松木のたけり海より船をさ
はの浦にさす所の船のかきりてはさすはとてふはとてふはとてふはとてふは

○苗圃の名産 ○仙基紐・紙布
日布より物奉書紙と
うりてはりてはり

海令・鷹・猪
大かきり・諸紙紙・金海原
金華山より物と石
てはとてふはとてふはとてふはとてふはとてふはとてふはとてふは

馬の尾・岩城雲丹・信支摺・合津漆・日曜燭・日曜鏡・南部水曜

津煙瑪瑙
琥珀・兼隆・津煙丹・をからた硯石
三月三日の天候

南部縞
○松毛産物・鷹・美羽・塩鶴・于鞋・靴・練袴

美絲・昆布
世に石淵を根より
大恩布と出で

ふ・あしとらへい・脛脛脈・于獨活・于豆腐・磯石

出陣

凡そ凡そ日初初と年終と陰奥の二郡と刻てこれを

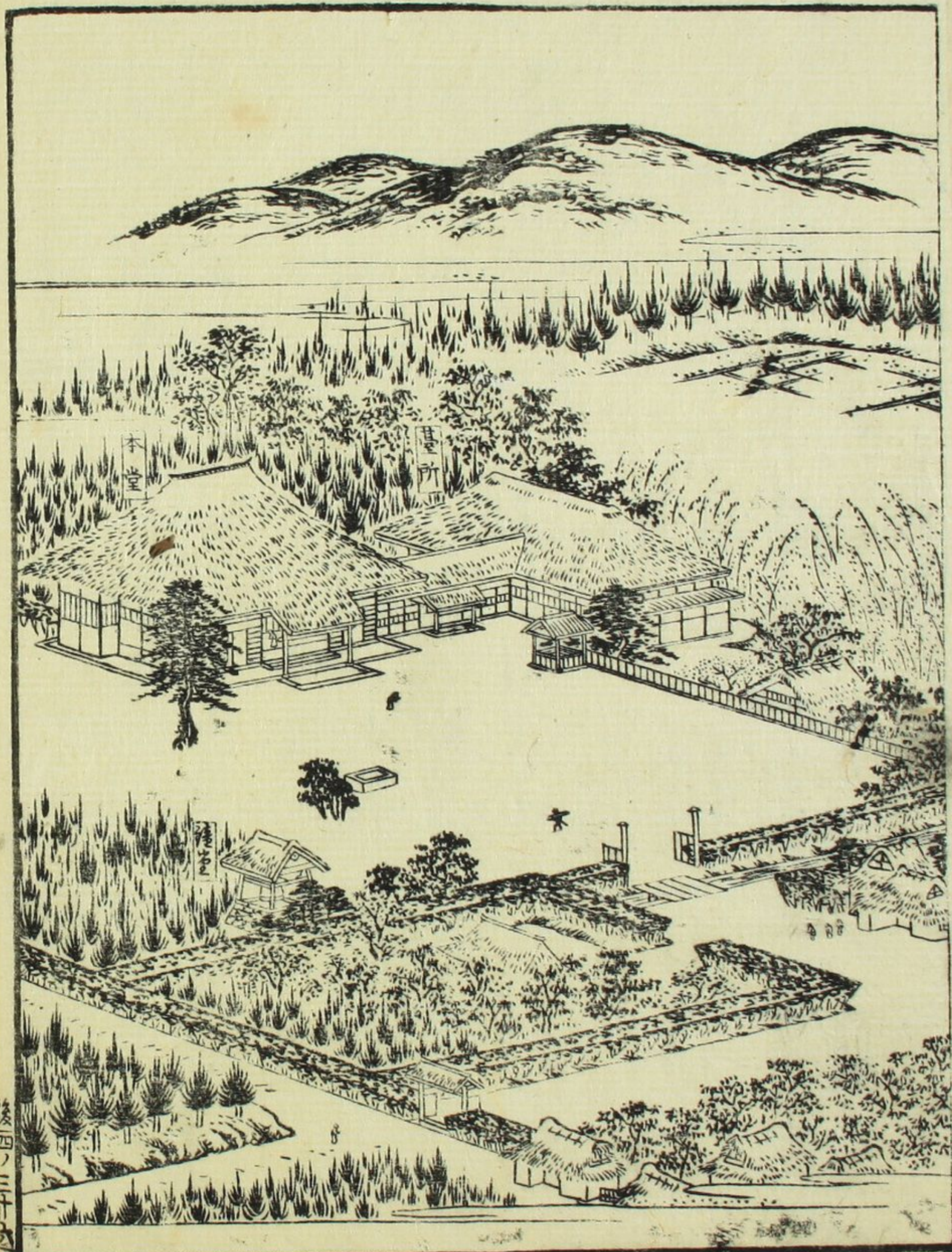
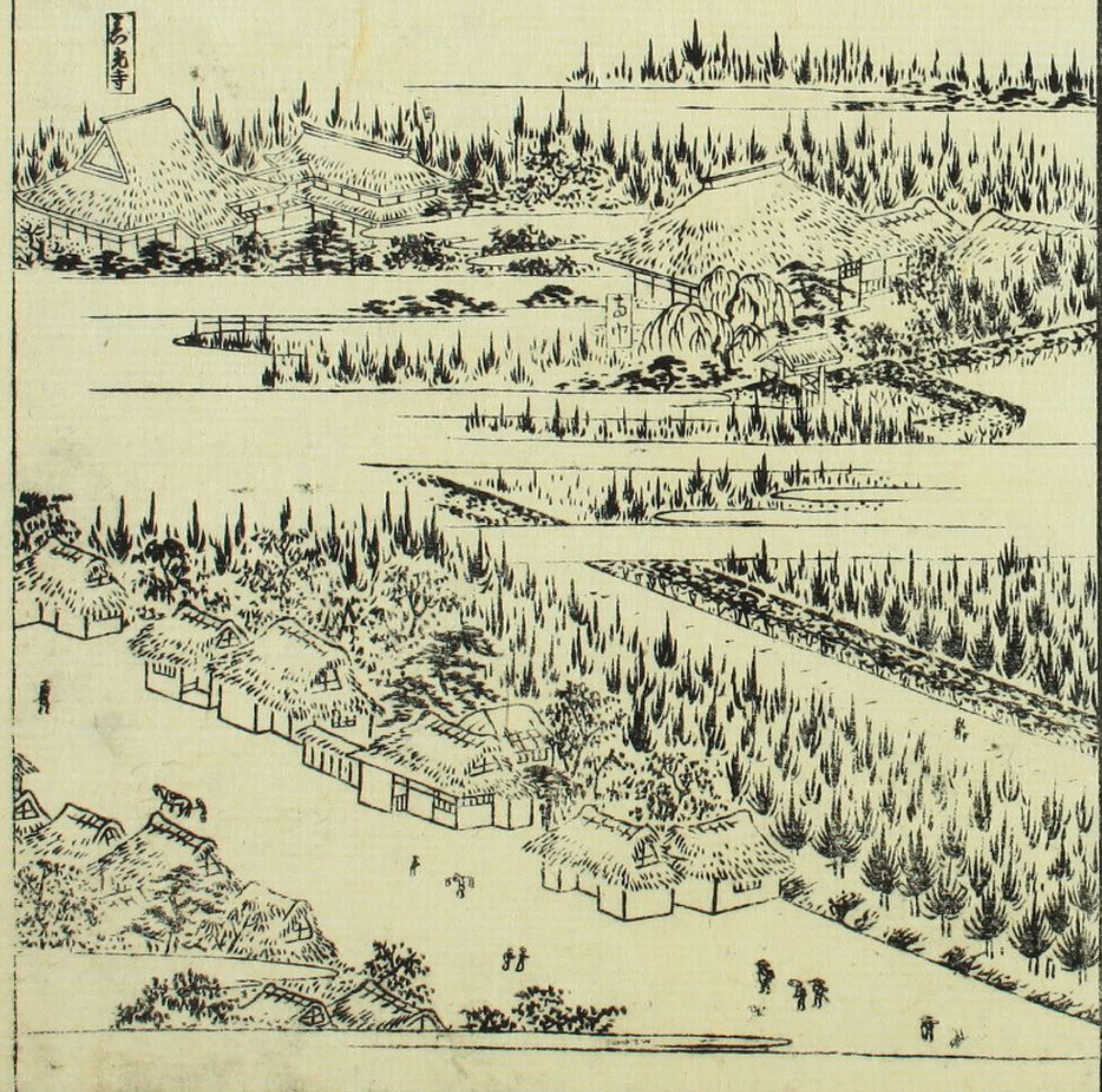
右水山若證寺 西流 出陣秋田郡六郡より

寛喜院と号は是信房の送跡にして縁起の盛園を拈言すは曰く

二十に輩牙十番の席と持てり ○本堂九間二面本尊阿弥陀如来

○苗山の寺況よ是信房の源三位教政の曾孫常陸公宗房の御子なり
福田よはひく重人の御子なり苗圃は教化一宇を建立し本津寺と

六郷善證寺
 真光寺



後四ノ三十一

号せりが蓮如上人を改めて新洲寺と号し終ると盛岡公は代官の
の修治は夫又艱難せりまがくこれと奉て後の知識を修め

真光寺 東流 日圓日石にあり

實珠山と号し縁起洋をうけ○本堂九間正面本尊阿彌陀如來
二十日軍笈二十一番の席と持てり

○山伏修二のふ板しり盛岡より六郷へあり奥羽の國隈ある修二其妻は其妻
て他邦の者往來まよむを此地の女老若をかぎり山をせたりて世をたはむ日
ふは奥山より石年の修二とて馬をいせりていふと世をたはむ
矣をいし即笑りて笑と彼をふつて高き實國のりりしを
修二つてまて白山修二とあり一山をくく水晶を産出せり
○教深 飽海郡又屬入海之陸野の陸系松修小をうけ大所のはり松と雁
修二の住真修二を系を束りては是又體をいせり一杯一実実又壯修二
夫松修二の二浦は秋田の勝系は又母の修二のりり修二の浦は小海の
してまき修二を海山のりり 乃修二のりり修二のりり修二のりり
橋有岩岳の國も遠くはして修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり
るいゆる心地してま秋は修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり

てい修二のりり修二のりり

日圓

○飛騨修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり
○うやむやの國又むやくの國は修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり
山をいふ本まむ修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり
秋は修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり
い修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり

い修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり

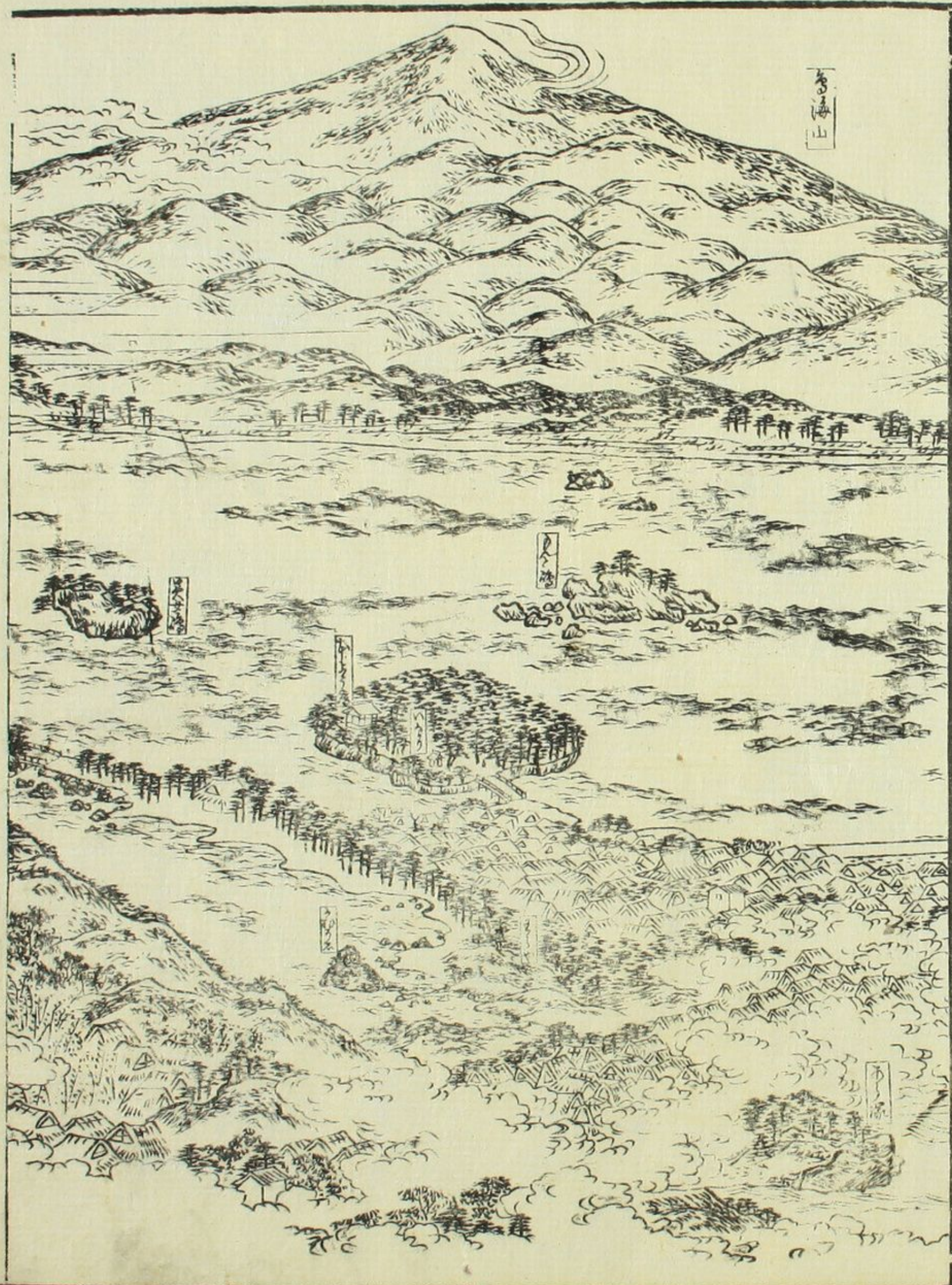
○多海山は修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり
一の高山より山中鶴巻修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり
言修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり

○是上川むやくの國の南より吹浦川よりなる坂田川とをいふや此川は盛岡一
の急流なり若し此川よりせりて修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり
引のりり修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり

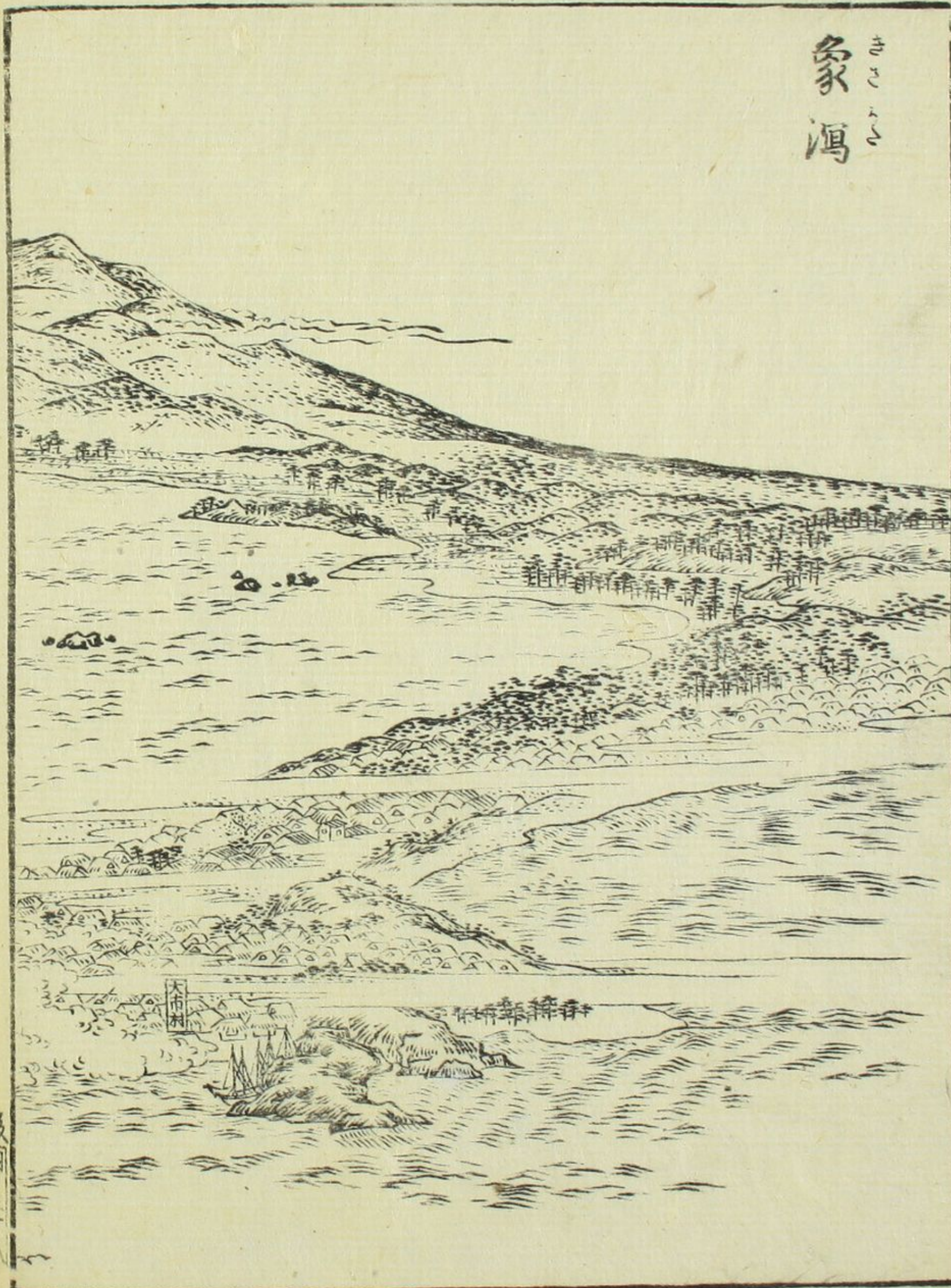
坂田川は川よりなる修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり

○坂田川の海は此地の倭より修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり修二のりり
此の浦の古名は此浦をいふなり

○孫黒山月山湯殿山は川よりなる川は川よりなる川は川よりなる川は川よりなる



高海山

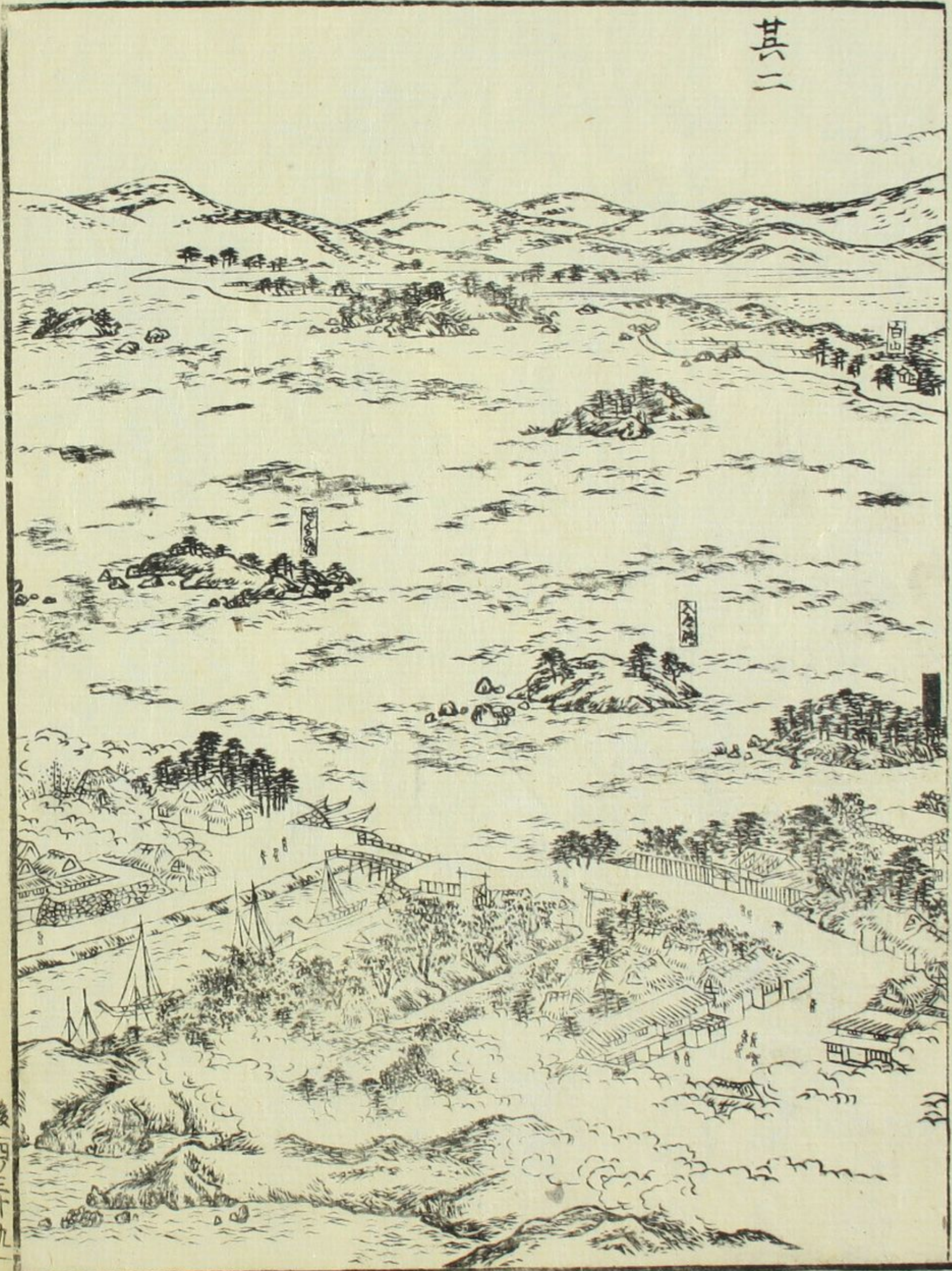


象
瀉



寺行二行

其二



後四二十九



孫彰田右即義俊の息なり其以上下を慮り下上を凌ぐの凡俗
久しくくびりて世に礼を以て人々を察し隱遁の志ひ頻りに即常
州那珂郡を喰村に避居し後身八郎信親と号せしが終に康久元年
の秋卯年二十九歳にして高祖聖人の御後身と仰り信願房と名く
路師命より河内國より一字を管業して真宗と弘通即河内
郡八尾三社後又常陸上那須郡栗原麻濟の堂宇を建てる専ら國より
寺を造り
弘法せり先即當寺の根元より聖人既し御降洛の日より仰りて信願則
これを供奉し相州御滝留内日と既近給仕せらるるが相州の道佐
聖人の御徳を去らひなり御興と云きり御發駕迄と延引らひりと
さまくは論し御上洛の後信願房は命せらるる相州を教寺と
し御此より仰ひく信願鎌倉一字を道佐し福善山淨妙寺と号し
勅化弘法とらるる慈愍なりなり
海州寺に相州赤松後
信願房かたのどく

不^レ基趾を開き専ら御流は功勞をのこし終に法曆七十八歳ありて元永
八年戊辰三月十八日大往生とぞ遂らるる其後教代を経て延宝八
年酉奉不^レ綴ありて當院を今の鳥山よりうつとらるる

○中川の鳥山の麓より東北に流るる水原の川より流るる出流合一と
常州水戸の海へ出け其急流の大河なり鳥山より眺望すれば十八の階流あり
ままこれありて奇観なり人々の不^レ測なるなる御教ありとらるるあり

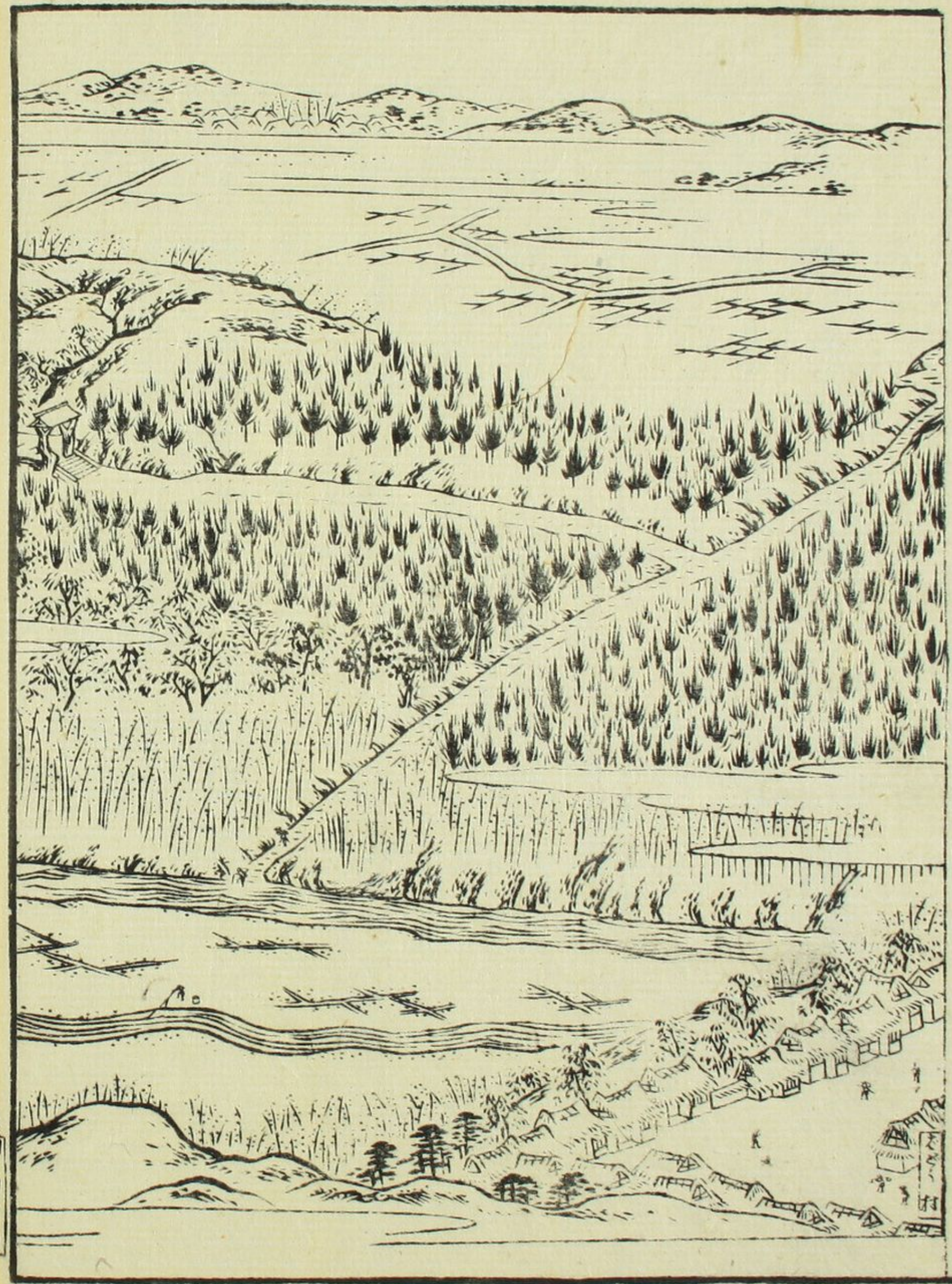
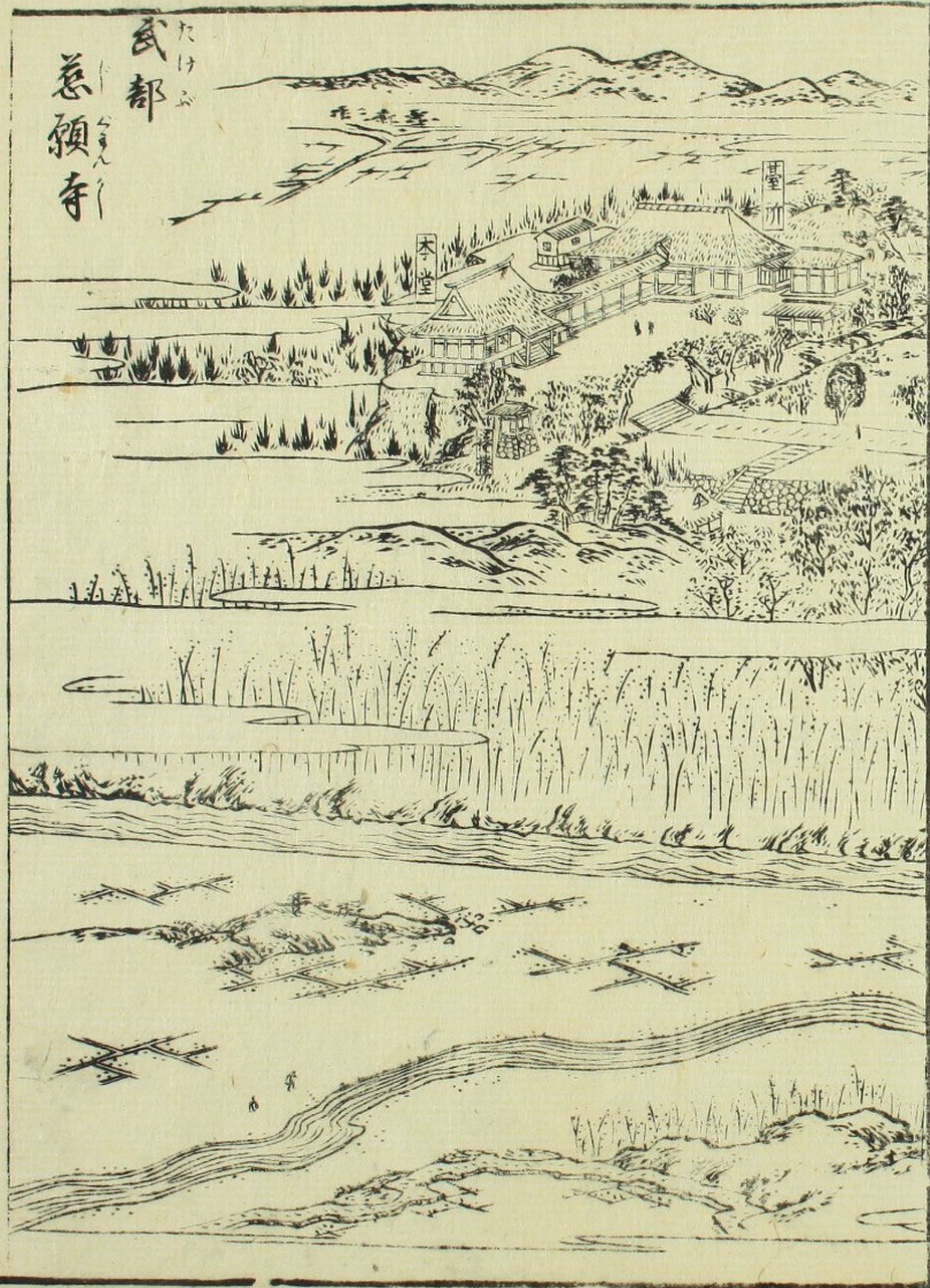
栗野山慈願寺 西流 日郡馬込郡より

當寺は右信願房の開基にして鳥山武郡西慈願寺何より根元は
流るるのを去りて或は云ふ信願房教志大徳嘗て栗原麻濟は一字と道佐し慈願寺と
号し後不^レ綴ありて天正年中當地より寺とらるるなり ○本寺の阿弥陀如来 吾人
親善寺と号しとらるる

高栄山法得寺 西流 日國都賀郡小山莊佐河村より

當院は四天王宗より一と醫王寺と号せり往昔聖人の工足性信
大徳滿國化尊の御以り仁治三年弥生より成れ當寺に御あり

大けふ
武部
総願寺



○夜にのたれをすうの道づとをむむくは遊するありうらむむあり
これをむむする者も人ども此とてまはるるは咽目睡て正しく
ゆをまはる海内の寿経のゆを

○秀降の海は口三とんまはるの海は下り兼研のくくわる谷とて能は松栢生
まがりてまより海はまはるの海はたると秀降の海はまはるくしてくるが如く
に方へ水は散れしと其終末たるとんまはるは嘗て天下の名工探幽
此際と對し其まをまはるまはるくゆをまはるゆを

○懐遠が淵淵たる大関あり山の下りなる波岩ありて淵の上へ
ゆありてまはる海はまはる嘗て海門室海淵をへまはるカニホロオの海
まはるまはるくまはる海はまはるまはるくまはる海はまはる

○日光山名産 慈悲心多首すうゆまはるて尾長し自名とてゆまはる
三光名 粟麻 日光若 山神皮 日光さうのゆ
まはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる

○はくまのそのまはるてまはるのまはるまはるの月いれまはるまはる
山の下りまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる

世は食物を強きゆを日光まはるゆの山神別あるゆのゆまはるまはる
る具とてゆまはるゆまはるゆまはるゆまはるゆまはるゆまはるゆまはる
美強るゆまはるゆまはるゆまはるゆまはるゆまはるゆまはるゆまはる
まはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
名産方るまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
とて其地ゆまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる

稲本山觀壽寺

西流 日國河内郡都官あり

二十に策并十三番又属は日國上郡須那西願寺日系乃寺也縁記
中系とて兩寺のゆに委しく記とをみてまはる書は

花岳山安養寺

西流 日國日まあり

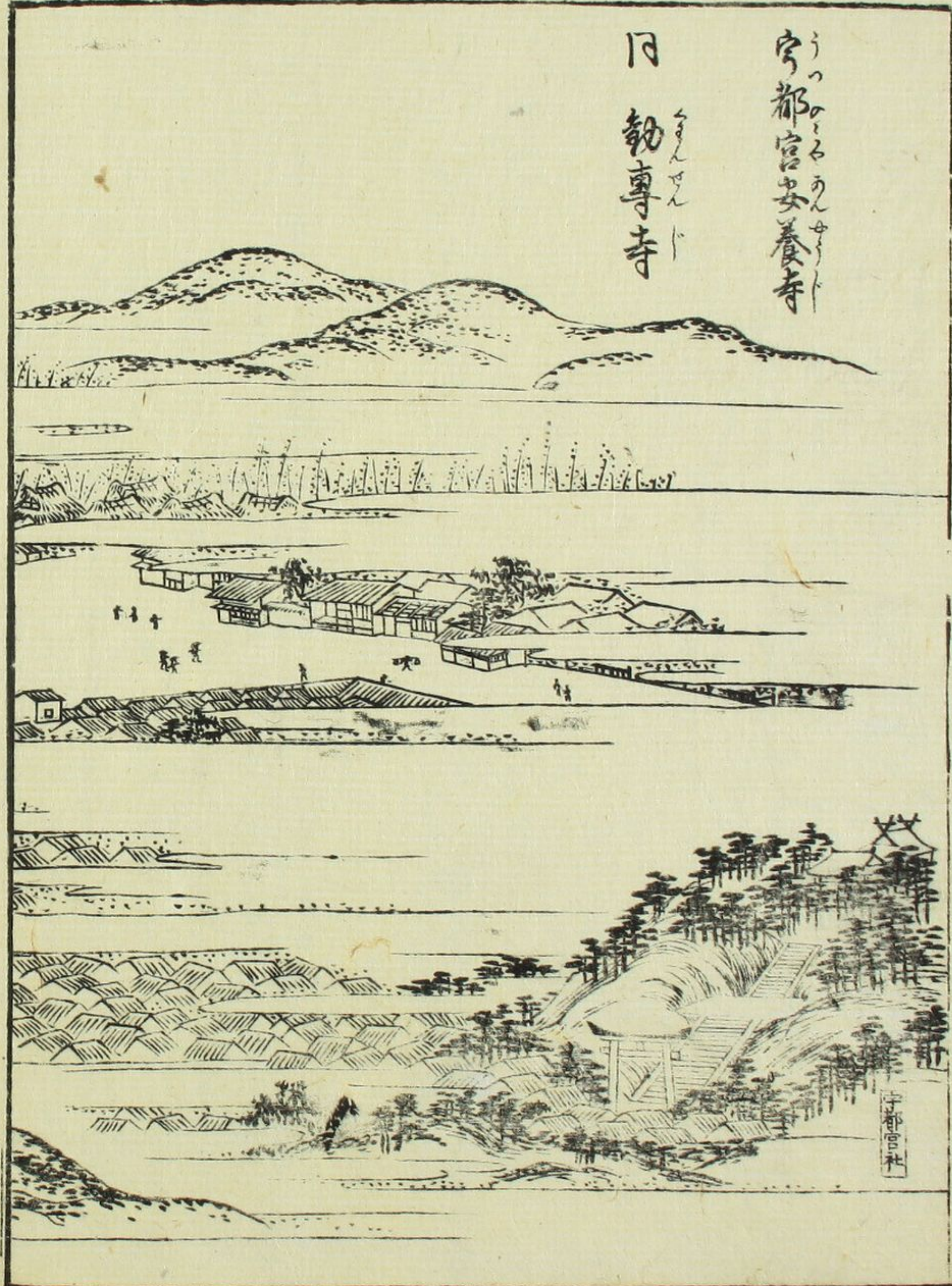
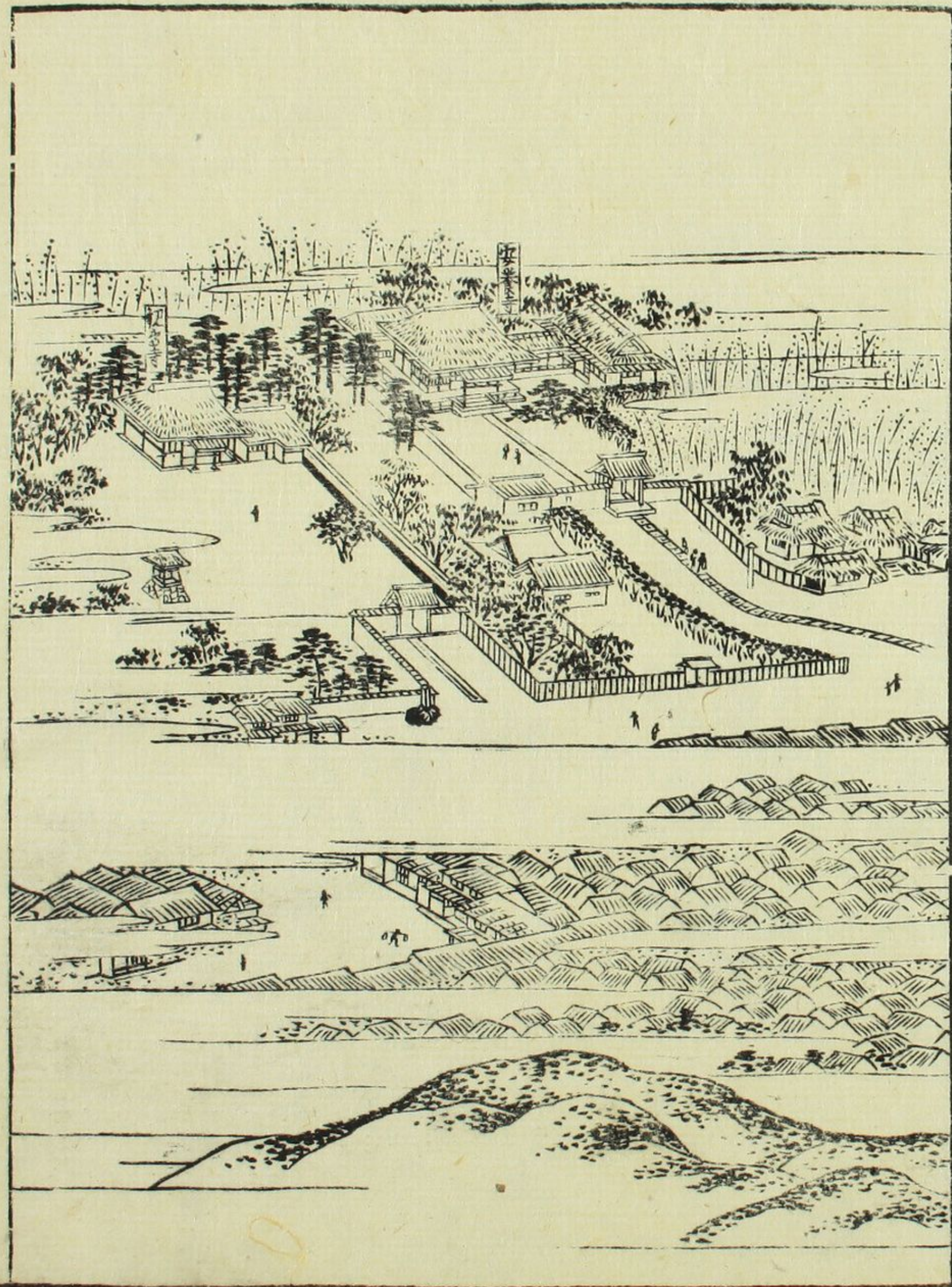
二十に策并に番抽同兼念房の坐と持てる寺系ありとて花見の圖
親書池の街齋高跡は山寺の持不あり

室の八塔

日國都賀郡あり

後本の風若ありとてまはる

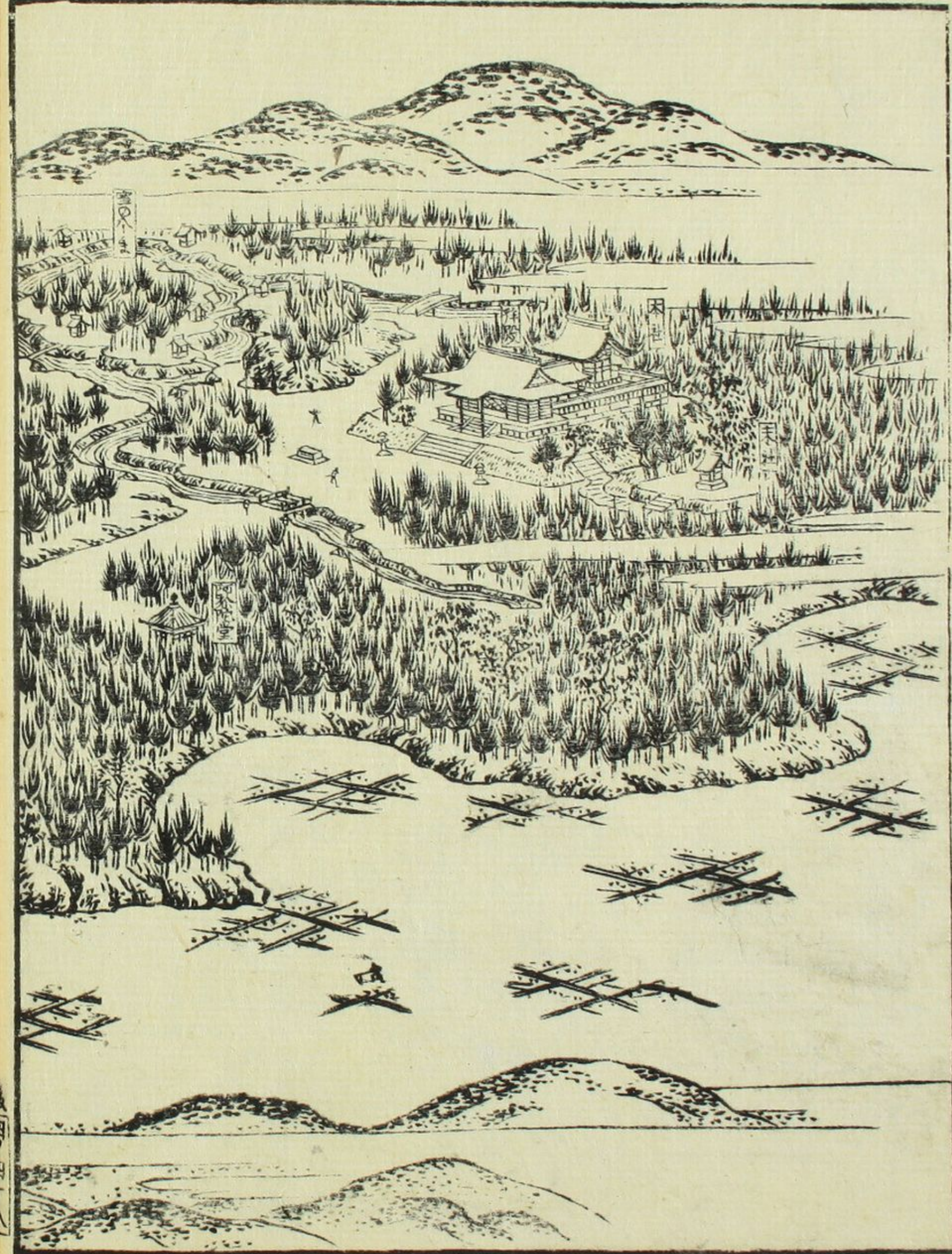
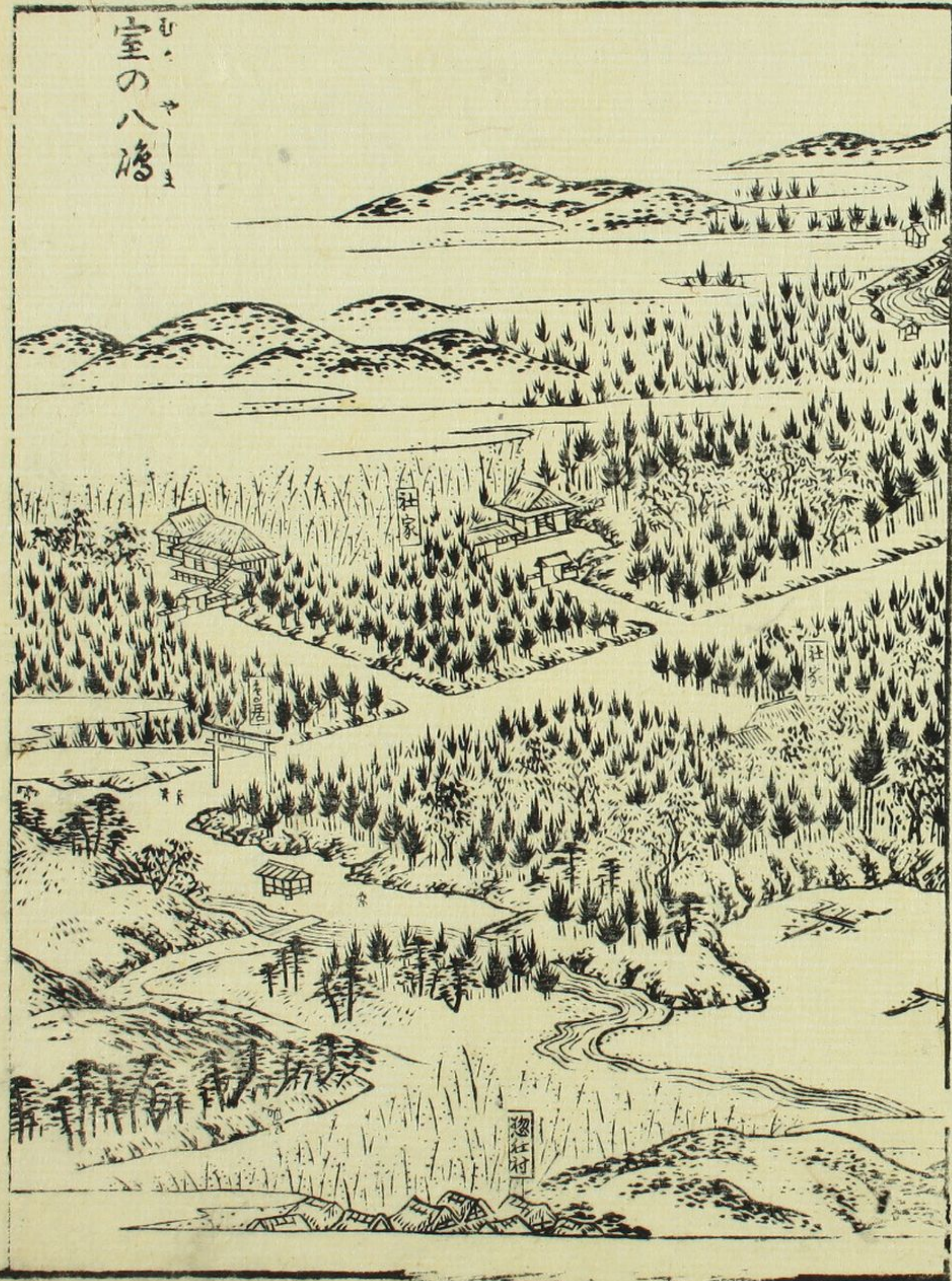
念房(兼属)ゆのまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる



うつろふあか
 宇都宮安養寺
 日
 専
 寺

宇都宮社

室の八幡



高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

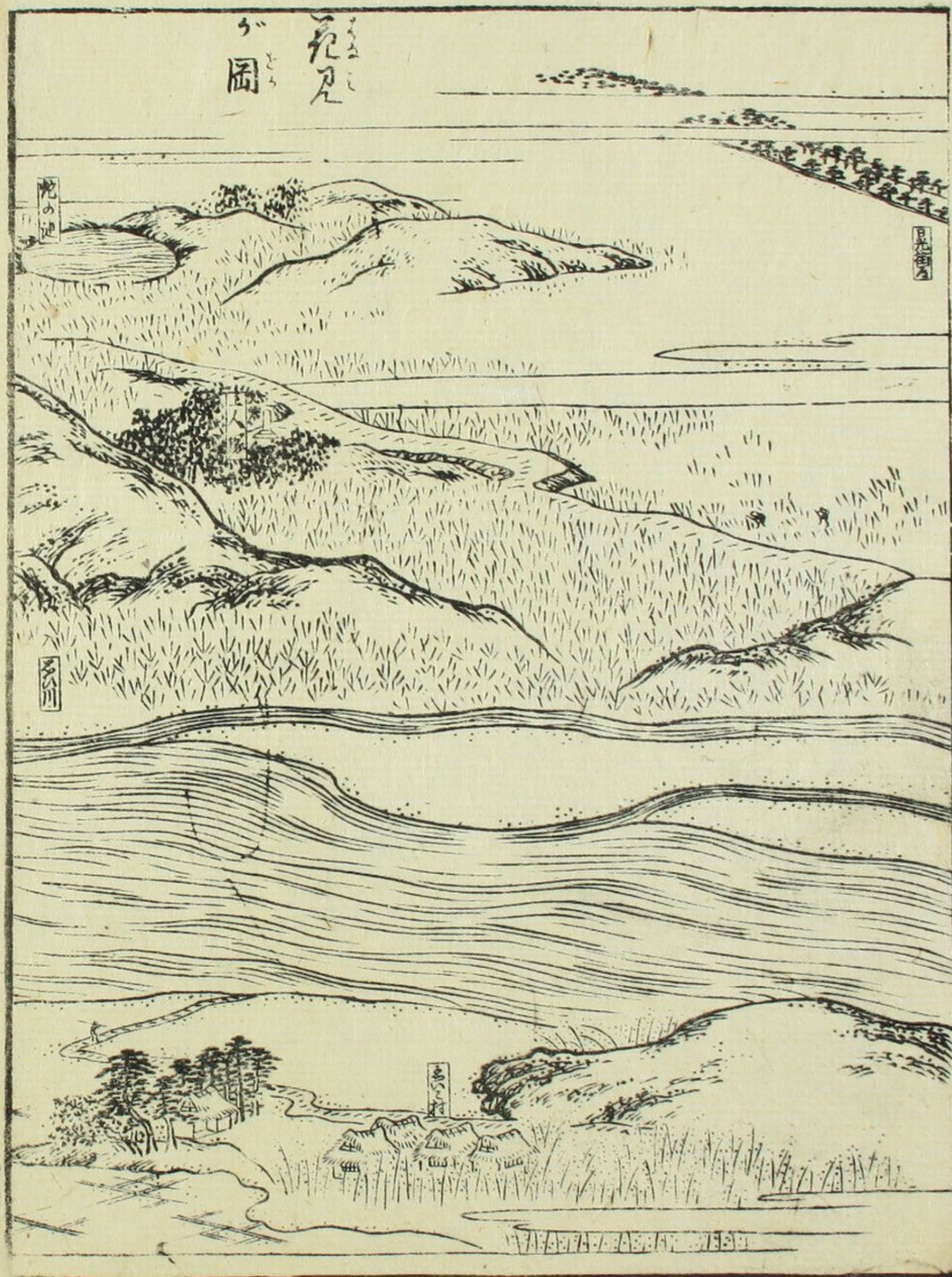
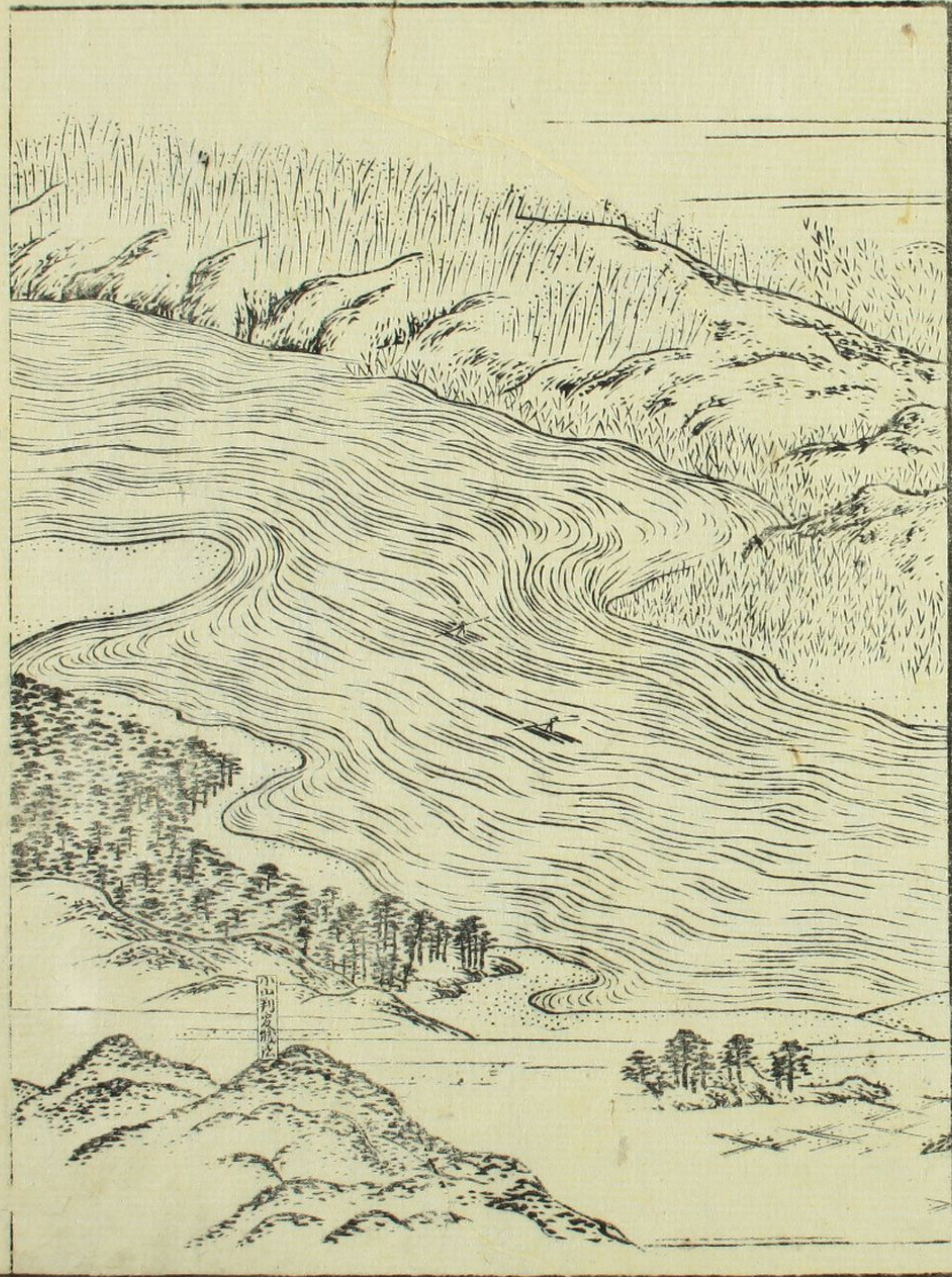
高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人

高祖聖人高祖聖人



一 結ぶとやあり其徳妙を以て彼邪神を降伏し諸人の災害を
除き給り滅ぶ廣き此恩徳をらんと思ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
思ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
の一助と即欽掌はしつて掃部が案内を以て彼淵を以てはくく
と順覽はし給ひ我れ降魔の法を修せ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
のいよほると人とも多年弘むる弥陀の本教化力念佛不可思議の
妙徳を以て徐に渠を教化せしものならむとて其甲斐を以てん
且ま毒呪惡龍より一且神と宗の人の罪を以て人をして後ま害するの
いよほるといふさま奇怪ありとまかりとて即淵を以てはくく
を以てらむ自是坐と占給ひ三部の妙典を翻し不可思議の
名号を唱へつ其いとまきは水中にひいて恰も人々對するごとく宣ふ
や此水中の怪とこれ何等の神かと里民と悩むるの由きや

且 魑魅魍魎のたぐひあり給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
不ぬ方るれとやう其教を以て我れまゝて改悔せ給ひ給ひ給ひ給ひ
汝が又授若と樂の佛果を得給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
惡を以てし人民を害するものならむ邪にまゝく邪にまゝく邪に
佛陀の有り給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
又佛法廣き利益を以てまゝく小教化せしつて 又てかくれし
して三日三夜を以て給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
あけらむと忽ちとして一人の女あり給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
多るや其の旧此里に若るが生得嫉妬の心は深く恨みと憎み邪
見あり給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
何れもぬるが竊に毒を以て中へ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
らば心さまやとけり給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ

さなきぶ胸の火はきゆるひまをたれ我方のふくむつとを思はしけ
しううかかてるかむれは悩寝るまよと忘るるあつをのぼとま
ま何して物方しきとまるる私まいいよく踏とて妻をんまの
仇敵のどくわればこれとくもかの女ゆんが私に罪を毒報
せんと謀も何とき女の智慧まいをやとこれをさとり妻ときい
いまめつて鬼は脱よとのあつてたまぐお擲せらばはし我は
よれ妻うれども此お横まならひと再びまま入んも面ふせと
とともせ質のあらとまをれいさやせんかくやと心ひとりよせま
忽ち私れ今人目と想とまをれ唯一念の怒を激て鬼ともい
脱とわれいふして彼女をさうこらし胸の焦熱をやとんと直と側
室よとわく彼女を見るより鬼一口ぬ喰んとせとまのあつと
何いせこれをまへとめんとい人つとまをれまをれおのいさうせま

らせんと其まきまの咽は喰付てあぐる女をすたをしあひのまよ
らひ裂くは日とまうとまよ女も死したるあつとまよし心も切
むりうまはううが俄と熱ありあつとく大焦熱乃若く通熱煩
悶して暗し人みも忘せと脱しがありし次女もいりて忽ち脱取の
よそわひとあり我方のううと押を逃しくならがはしくこと
方る九島毎々危の淵とまよ入再び人よまよとまよしとらうひ
身の業火三徳は冬日熱とまよとく心狂してへをまよらふ
解血咽をうらかせばうまよや暗射の若悩をまぬぐうれ解
むつとむらひとまよとてまよとて教多の人民を悩はしつと
罪をかきつうかひ漸とまよ我方のふ日尊き聖人の漢
孫名微妙の冲怒水面といき清涼して脱と我方の焦熱と
まし若悩とまよと身心全く安きがはしまうのまよは聞法り利

蓋淺くは貪利の心忽ち又翻り善徳を求るもの又一切の善を
宿因の善根と仰給うけり聖人大慈恵をされ給ひ今より奉
三月の間梵音をえさせ給ふるらん其功徳を以て即脱身と解脫
せと給ふる小なるべしと涙とより小のれをき三拜九拜ととて
其ま水の中へ飛入ぬ聖人にて奇特な御りめされりや三日三夜
間誦經念佛を修し給ひ給へ奉願化力不可思議の利益を
授せ給ひま婆娑流瀆の間三悪に彼を出せ給へ惡業は若くも
我化力の悲願ははるるくはしてや汝懺悔の功力を
只一向一心に佛とてなり奉り世に助けり一定彼を治定と仰い
さらし其のまじは報討の祿名と執るるも御自力を
あへ給へ化力をおまうせ易かれ奉願ゆめ給へるるまじと
念ころと御慈訓ありせし給ひしうの身七日の満朝より水の中へ

教ありて今度大加満の御教化よりくるまじ御佛の悲願をき念佛
の利益廣きなりを信し奉り南無阿彌陀佛と称する内忽ち
素の苦徳を忘し終に今日脱身を解脫し給へり天上の果と受
いとや結縁のるを得脱の次母と諸人よまゝ奉りせんや
の聖人侍人き我もくとは給ひ奉て大に群集はし給へるる年の刻
と御りき以て風飄然として水面とてらんが聖人の心潭心より一行の
白雲のりり其中に彼女ありて虚をのがるるを見るまじや
菩薩の莊嚴を仰いし宝冠をのこけ聖人は礼拜し終に天は
又々此時虚を又々その花よりなり異香に方々まじり地
落来し則ち甘露と化し給へるる見る人奇美の心とて聖人の法
徳真宗の化力と譽嘆せ給へるる中にも掃部は又々教ひ聖
人の大徳は屈伏し佛法不思議の跡ゆかりを信し渴仰のあ



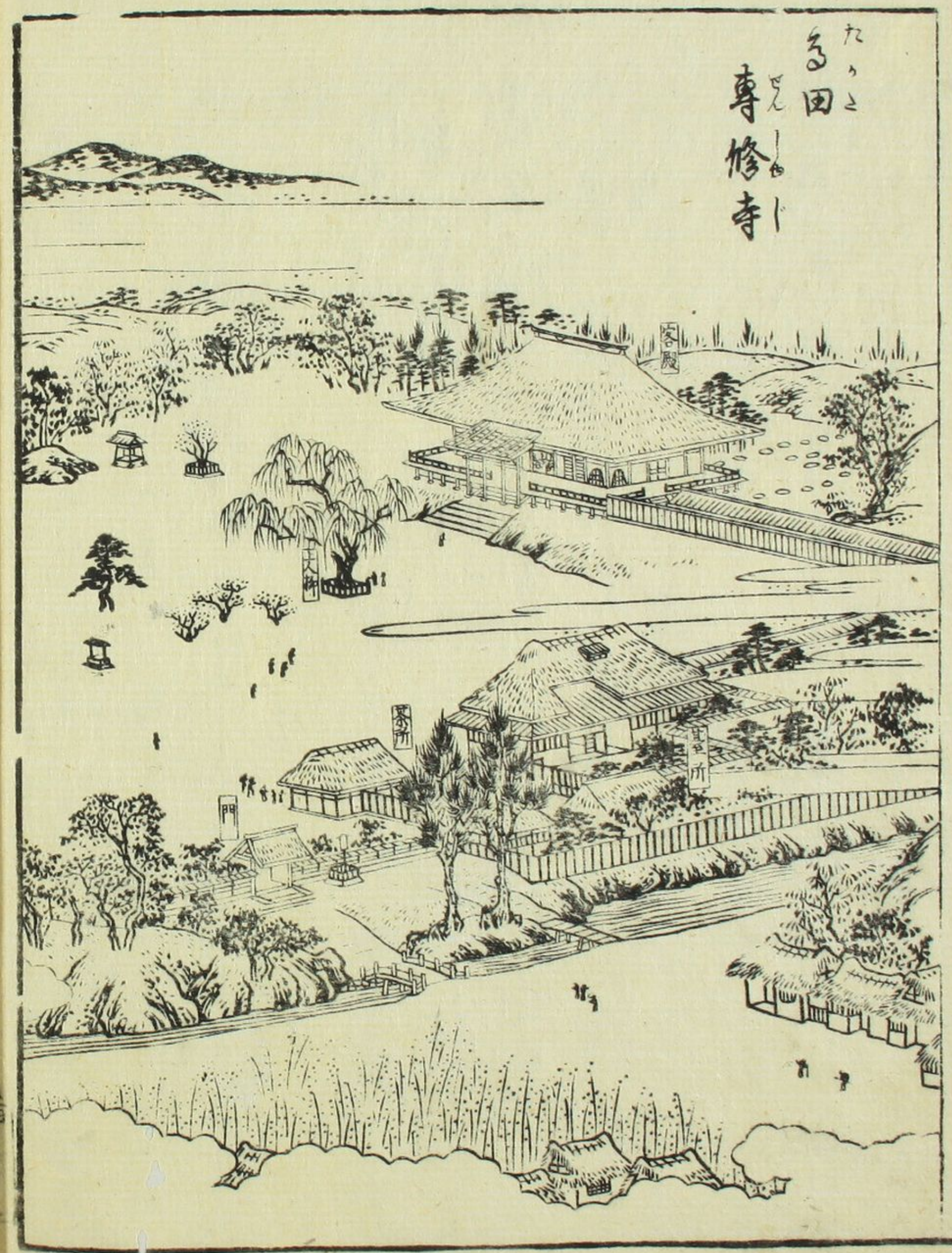
まゝ其牙神官なりとすも密に聖人を傾礼し於陀の卒願具降
命して又二心なりとすり即ち其の程は釋集此人のいふに遠近
の若し安徳へ聖人の徳ゆきとせ給ふをまゝいさなり即教化とせり
化刃此宗門を為す事とす若奉て教ふるに比ぶ東方遠都の國に
まはこれと邪見及法の族まゝりしに今まの何なり體身天上の果を受
再び性の妙なりと邪神の災害はまぬ道は深く念佛は後
しるら後世の一ちを心うけざるを殊勝なり是の丸山に其時諸人
釋集して天をを見るるありいとて花見の岡と名づく又淵と親愛池
とことと共に日記に見へり
傳はるに
即ち都宮安養寺の指石に
て碑銘あり

高田寺修寺

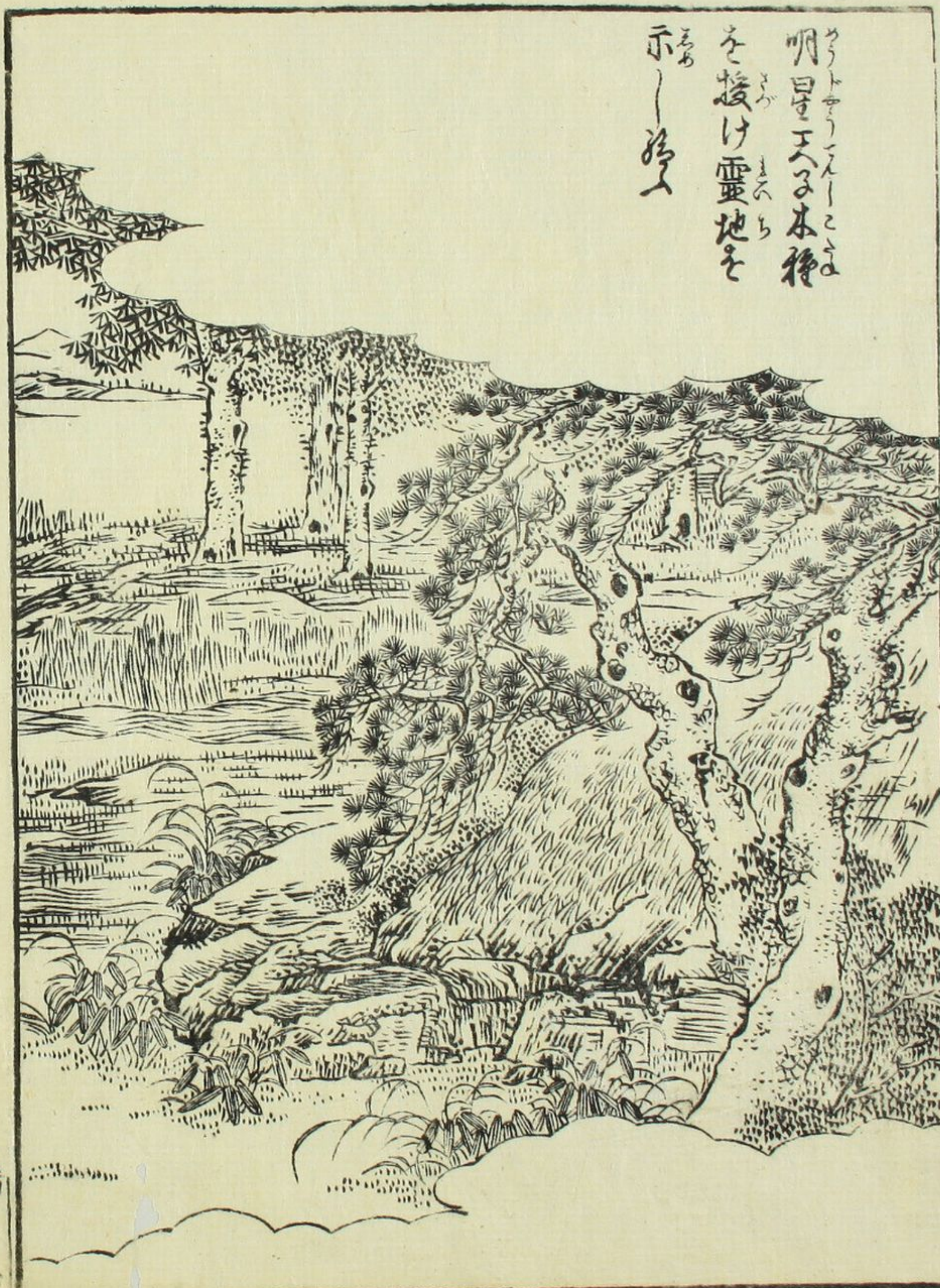
日圓寺及都大内の匠あり

出院阿彌陀寺といひ
無量壽寺といふ宗祖聖人開基所建之の靈場之勢州一身田

御門跡の御田院より今ハ御兼帯所と必まり○本堂十一間二面
開山聖人御肖像を安置此○金堂阿彌陀
を奉る若光寺日一
禱の如來出山乃開闢其中未を事くより出初元仁二年正
月八日高祖聖人附は御年
五十三歳出園大内の莊柳嶋とするを此の
善治いし紅日既西かたふき倉部孤村をうこきてより池
何處も宿と求むべき方えなれば蕭然と彷徨給ふか又又大
なる石板舟石といふ
東に西に七寸五分ありのありしは旅のならはしとて即石の上を
とあら静に念佛して得しより多ふ夜もやいしく交りて長庚
明星ぬよ東よのかりんとするに母一人の天童忽現して出まはし
り聖人これを見給ふ一尺あまり此柳の枝は白紙の色と添ふよ
推し東西又盤桓してうきていさく白蟻の池のときりよは一疾の柳
枝に敷舟の船の南は佛生園の種生ぬと朗詠するを數回



たの
多田
専修寺



カトキウエンコ
明皇天皇の本種
を授け靈地を
示し給ふ

しめて山を向ふて去んて以て聖人急ぎこれをしりて重なるいり何國の人
ぞと問せ給ひしに即答てまうさく我のこれ明皇天子幸地虚を
我菩薩なり師又伽藍の靈地を示さんまてこそ来りりまも色
なりとて南方此水田と指しこれ此柳橋の地は往昔釈迦牟尼世
説法あり靈場にて則如意輪觀世音菩薩佛勅と受り方後利生を
結終ふの梵區なり聖人よく此地又伽藍と建立し此二樹を植終ふに
これこそ天竺白鷲池の柳又け包らるる正覺山此菩薩子こそか二
種を聖人又授ふるなり聖人かよてのこまり此地を圍ふ熱辣沼
田にて水溢るるいんがて伽藍の地と指し傳らんやと問せたまふ
童又張礼として著はるる水中又入るるに及んが終り其方なきに
聖人よく奇特の事いとはし給ひて終り彼柳條を水田又挿し其
子と産石の南方又種を給ひとらるる石にのりて念佛して挿し

たつた子夜もあつくと明りたりたるふ不思議や花に種終ひたる
の二種の靈木忽ち根牙を生しとるが中又二木又餘る大樹も花
と下まり緑陰に方又布り板又彼水田の今また溢し鱒水何れに
流るる中央凸礼して小るき丘と名なり
道俗これを見給し一と驚嘆して聖人を多信せ給ひて
此の隣國までもかれたて人々渴仰のけしきをうけおとさ
下野の國司其國の城を大内國司と給ひし久下田を即秀國小栗
の城を尚家真壁の郡司春國相馬の城を高真平塚の莊司重連
同の城を其真戸人と附る名を得て彦家の面を我方にして聖人
伏しなり其重礼教とるの恰も如來世を此とて各自砂石を運
竹木と引て梵宇造立の要剣をうらむは禪を老若美談の分らなく
集り来り人々の雲たてりつらつら向よりは木石の山とにぬまの

以常經二冊の諸芥子奥羽兩國の門徒の軍雲と凌き劣と分らく
群集」既又日ありて程舎造立るらんは先聖人宮村の草菴又
はしつて不思議の靈若と得たり以て其年の四月十日の夜に
刻むり又一人の聖僧來てのたまけり師の教奉今既又濃足なり
此上の速又信濃國若光寺又來り給り我身を分りて師又授く給し
伽藍落成の日又至てこれを安座」末世の衆生を引導」給はし
と若母より西又向ふくまきり給ひし高田の地を消うせたりと
見く及みぬ聖人歡喜斜るは即御芥子性信順信の五六徳と
既へ急き若光寺又信て給ふ爰又十九日の明く若光寺の傍後小
本堂又舎合して相しり信て曰唯我特の御若と此處より御本
為阿彌陀如來梵音を奉て曰く明か我法牙若信法師 聖人の御
と乃登山とん」兼て我軀をまららつるの約あれは汝等謹で是

を授く給しとまじく授へせ給ひ」と異は日夕の爰物ぐアリこれ
そも不思議の靈若ると檀上を拜しなる小日一醉の三々おとん
て立せ給へ一列十有八人の傍衆多佛勅の何とさなり不感涙膽う
給へ今又始めぬ本尊の靈聽各淚歎はるなり聖人の疾に日又
絶で急がせ給ふ程又此時既又漸差ならせ給ひしは衆僧於て迎へ奉
り佛勅の詔きはるる物ぐり檀上はましまし一光三尊の貴令佛
を奉り來り聖人の歎くもれが聖人歡喜の涙るが即袈裟衣又つと
とり給えらりしまよせと自らを負せ給ひ眼と若て立出給へ順信
性信の法法師より一助負まはせ月廿六日宮村よこそ下向はし
なり 若光寺南門觀音殿を應房佛代は此のつとまじり給ふは三尊一光のる像の三國を取の
靈神圖傳傳令のを答ふては此の如きなり其靈聽のつとまじり給ふは三尊一光のる像の三國を取の
一の佛像より分り然し此の靈神圖傳傳令のを答ふては此の如きなり其靈聽のつとまじり給ふは三尊一光のる像の三國を取の
せかけり代々の希天拜あせ給ふなり給しと天樹のる像と号しとや 爰又抄して聖人
志氣慈皆濃足何とせ給へ日廿八日より御堂造立の祈物力を

多分の終ふ又化力の門後多結まうけたるゆゑはうて期
したる飛弾信濃の番匠多々命と日頃の精力十倍して
さむり結構したる大御堂御多事日月上旬よまて令堂親
堂を以てめに門築地のうりまて悉く成就せしむ彼柳及び
菩提樹を訂の左右に植させ二樹も今
二樹も今伽藍成能乃御依養ありてめでたく
後縁をらせ終ふ歳又權化不可思議乃靈場なり其後聖人
御年六十歳貞永元年正月十日富院の御任職を真佛
上人上人の俗信法流
下室に委、如法又譲り終ふ真佛安又抄ひく第二代の法
脈相承阿門で終ふ心嘉二年三月八日法臘又十歳少く富
院又抄ひく寂し終ふ此附上人
年八十六歳これよりして同年十二月真佛
の法友聖人の御直弁教智上人附法相承して第二代の
任持職と譲り終ふ其後七世と經て第十代真惠上人の御

附勢州一羽田へうり終ひ富不乃右院の今又相傳と善第

終ふと云 ○御靈室聖人の御真像 皇太子の像 真作上

人像以上三像とも聖人の御自他なりこれい真佛上人の肖像へ真佛滅後高田の
御智禪在寺の信流といふこれなりとい信流の御前とて得て懸禪と違禪
御前真佛と懸禪在寺は安ん御智の御別禪とて是也
御着を造り長し懸禪真佛と懸し富院より傳せり 御智上人の像也

般舟石舟の石林
の中あり 柳樹 菩提樹 高田九世の御墓境内松林中
に石置あり

明星の社る田の合あり
柳樹の社あり

○富院第九代真佛上人を中依り富下野の國司真圓の滋を大内國司の
舍分真壁國春の嫡男権尾孫三郎春時をたかり終ふは伯父國司を
桓武天皇の苗裔鎮守府お軍平國春卿の末孫ありて世々継いで
家系なりしは東國 又抄ひく肩をたかりうりのもるは門懸は
もけるもやや終ふと云ふと云ふはうりしはうりしと云ふ
とつ舎分國春の國司を譲り自ら宮村の地を老叟とて宮
歴居して抄ひくうり聖人る田又抄ひく種々奇抄のなりと云ふ
又聖人の法徳を信し渴仰のあまり宮村の歴居(歴信)
有り開法隆喜まうえに終ふ刹發して御并多かりる田入道

殿とぞ中々此所城東の郡司在司我しくと聖人と改依
利氏法衣の衣とありまきりしは國切の舎才真佛國壽是
と日と道と入んと海と心をこららばしと舎定の國司遷りけ
當城のふりれらるるにせむまはひき嘉祿元年端子推尾
孫三郎春附をりて聖人常陸の所才とぞぬりよる是即真佛
上人の所才之○世に人の所才を平を即真佛房と日人なりと
る人もまはし是日名異人なりとゆらぐ泥どぐり○享保の
記は上人の俗姓平氏なりと高武天皇の後亂平經盛るなり
重石石保重丸と云知雅の所才法統上人の所才なりとあり
佛真と号博識多才の六徳ありしが空師汲く後ひしのち
る祖と法後し名石真佛と云建保年中結城孫名寺と開
基し嘉二年三月八日に十三歳なりと云叙を石真佛生後開
開し石名の靈區と云三ヶ石孫名寺創建の後一男信澄と云は
又下野國多田寺修寺と祀主し石智二女と祀嫁して是と傳り
又磯州淡谷貞心寺と造立しと云統と云も真佛の俗姓孫名寺と
石満書ふ石統と云又佛光寺と云真佛修寺の二山の真佛の同基と
あり高祖聖人所造建の靈場と云るや等しと云はし享保の記
何よりくかく傳記せる甚いぶし○本人の云真佛上人の事は教

宮村河田跡

御の一より平家滅亡の後世の空へと傳りて大内家と後親と
一出家ありしと云や是又其理の又傳りて多代石名寺の記に
是は大又信用しと云○真佛一男一女の石享保の記既に云の
正し統と云遠跡孫は孫石名寺の相承り真佛の俗姓西宮信隆
房と附屬せりといふと云はし是なりや又石名寺の記享保の記に
又傳り誤謬後しと云る者も拾せどもいふと云はし
聖人所造建の靈場と云る同く一里と云り山の腰あり此宮村と
云ふも又聖人の所造建の靈場と云るも人の子孫今も云ふと云
○天明當國統の近藤これむし茶舎と稱し石名寺今も云ふと
云ふこのめり人天明寺と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
○是利の學後統統より西梁田と屬石名寺後仁明天皇の御時
小野宮用基せり聖人石名寺の先聖の肖像顔曾思孟に記り孫を
を安し萬葉集卷五の石名寺と列記又著室と號しき小房と云著
格著撰の具と記し傍に管の神と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
て云ふ石名寺の管の神と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
概はありと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
して附し世に密宗の俗姓傳はしと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと

聖賢建立の功ハ上林憲實ク企テ不有テ一々種合因差寺の樹成呼ビ之ルガ
階級ノレシヒヨリヤ云仁明の朝堂大庭より降朝ノ自ラ傳學多材集テ
てのまほく六十餘冊ノ學校を設ケンヲをテヨリ世レハ一國源入人入テ文化
更ニ其ノ功ヲシハルヲ柱リ以同建立セテ不レドモ文レクバテ以テ後垂ヤリ
國ノ學校のノ量ノ知ヲ不テテ唐朝傳来ノ先聖及び十哲ノ畫像并樂器
の圖也等と謂ク昔々古書儒典を傳テて是と爲ル一退將ハ只レハ按テ此況ハ
抑々シク後年度ノ乃兵史ノ學校ノ基址傳奉ノ書画多燒失セテ後人
又其志と雖今ノ學校を建ル者方々一とレハ是れ被畫像多ク其レ
今ノ傳入ハ其ノ天中ノ玉堂と云ルレハ惜リクニシレバ一其餘唐
以前ノ古書多ク今ノ知ク者多クモ多クノ既ニ近來傳朝にて翻刻
せる七經並其ノ人書也被國今ノ人々ノ書き此學校又秘藏也一云
て矣國を以テ文レハ海ノりて秋亦方其國の文徳を仰クまレク
豈レ一ノレをさレテ修ク切カラシクヤ中レ三要件ノ人修也學校ノ
修レテテ系際ノ出テテ付テテ書藏を拵テ今ノ昔ノテテ書藏ハ
多クテレレレ也一國附代々種合建長寺の傳法の中より傳テテ書レ
儒書と謂フレト云

○西國の名産・大方紙 那須より出其外那須ハ・漆・箔・布・多都宮堂・國扇
別所・富の物・餅糰・輪桑・牛房・胡

新居山稱名寺

西流 下總國結城ノあり

以下に寺々ノ順拜の路程の事ヲ記レテ其傳説ノ事ヲテハ國分の
例ニ依テ其都ニ出セリ

高梁山法得寺

西流 日國佐野ノあり

野田院宗願寺

西流 日國古河ノあり

新野高山勝願寺

東流 日國砥石ノあり

高柳山光了寺

東流 日國中田ノあり

親寫聖人
河菫跋

二十四輩巡拜圖會後編卷之四終

